

ベルリンの玉井喜作

Kisak Tamai in Berlin

泉 健

Ken IZUMI

2004年10月7日受理

序

これまで4回にわたって、『Ost=Asien』の基礎的なデータを整理してきた。すなわち以下の通りである。

「『Ost=Asien』研究～その1.全目次」¹⁾、「『Ost=Asien』研究～その2.人名注解；外国人編」²⁾、「『Ost=Asien』研究～その3.人名注解；日本人編」³⁾、「『Ost=Asien』研究～その4.全目次；独語版」⁴⁾。

これらによって、『Ost=Asien』の目次の全容と、そこに投稿した人物の略歴、及び各人物がこの雑誌の何年何号にどのような論文・エッセイを書いたかということが容易に把握され得るようになった。そこで今後は、これらの基礎的なデータに基づき、玉井喜作のベルリンでの生活の様子を振り返ることや、『Ost=Asien』の内容を様々な角度から分析していくことなどに重点を置いて研究を進めていきたい。

まず今回は、『Ost=Asien』の編集室の所在地の変遷と、日本からやってきた家族のことなどを中心として、ベルリンの玉井喜作一家の様子を見ていくことにしたい。筆者は、1999年春から約1年間、ボン大学で研究する機会を得た。そこで、その年の初夏と秋にベルリンを訪れ、玉井喜作及び『Ost=Asien』に関する足跡を訪ね歩いた。

本稿はその調査結果の報告と、同誌に掲載された5つの記事の紹介を主要な内容としている。その記事とは、『Ost=Asien』創刊の辞のドイツ語版と日本語版、玉井喜作の追悼記事、老川茂信の復刊の辞、そして玉井^{あきこ}韶子の追悼記事の5つである。

I. 『Ost=Asien』創刊の辞

1. 『Ost=Asien』におけるドイツ語と日本語

『Ost=Asien』の創刊号は、1898年（明治31）4月号であった。この号には、玉井喜作自身による創刊の辞が、ドイツ語と日本語で掲載されている。同誌はドイツ語の月刊雑誌であるが、日本語による表記のものもいくつか見られる。それらは大きく2つに分類され

る。一つは毎号に掲載される広告であり、今一つは目次にタイトルが載っている論文、エッセイの類である。前者は結構多いが、後者は非常に少ない。

毎号に掲載される広告には、高島屋、京都西陣織川島甚兵衛、ヒゲタ醤油など日本のものもあるが、やはりドイツの企業の広告が圧倒的に多い。使用言語は、ドイツ語のみの場合もあれば、ドイツ語と日本語が並記されている場合もある。内容は多彩である。重工業関係や軽工業関係の企業の広告もあれば、書籍店（ライプツィヒのグスタフ・フォック社）、文房具（今も続いているシュテットラー社）、写真店、ホテル、洋服屋などのものもある。

筆者は経営学の分野は門外漢であるが、毎号掲載されている様々な広告は、ドイツの企業の歴史などを調べる分野の研究者にとっては、基礎的な資料の一つになるのではないと思われる。この広告の問題は興味深いので、また後日稿を改めて論じることにはしたい。

一方、目次にタイトルが掲載されている論文、エッセイなどの中で、その本文が日本語表記になっているものは非常に少ない。しかも当時のことなので、日本語と言っても漢文調の日本語である。主なものをいくつか挙げると、この創刊の辞以外には、通巻No.20号の玉井喜作「浦塩斯徳（ウラジオストック）入監始末記」、通巻No.102号224ページの「特別広告」（老川茂信による『Ost=Asien』復刊の辞）などがある。

ここで次に、『Ost=Asien』創刊の辞のドイツ語版と日本語版の内容を見ていきたい。まず巻頭にはドイツ語による創刊の辞があり、次のような文章である。⁵⁾
（ ）内は筆者の補い。

2. ドイツ語版創刊の辞

緒言

この数年、東アジアは以前にもまして、ヨーロッパ全体の注目を浴びている。東アジアの各国、各民族には、それぞれ見過ごすことのできない相違点がある。しかしヨーロッパ各国も、それぞれに

相違がありながら、ヨーロッパという一つの共通の文化圏に属している。その意味においては、東アジアも、個々の相違点はあるものの、そのようなひとまとまりの文化の枠組みに属するものとして捉えることができる。

東アジア全体は、この月刊雑誌のタイトル (の副題「貿易、産業、政治、科学、芸術などのための月刊雑誌」) が示しているように、その内に様々な内容の領域を含んでいる。しかしその全体に関わる使命として、今まさに特別な目標が立ち現れてきている。それは、日本とドイツの間に、活気に満ちた直接的な商取引を振興するというのである。この両国は、最近10年余りの間に、東アジアとヨーロッパで急速に国力をつけてきた国なのである。

ヨーロッパで、一人の日本人によって初めて創刊された月刊誌『Ost=Asien』の主筆として、私は以下のことをお伝えしておきたい。4年前に、私はシベリアとロシアを通してベルリンにやって来た。その目的は、ベルリンの有力な新聞社で記者として働き、また契約記者としてドイツ内外でも勤務するためであり、さらに日独間の様々な事柄、とりわけ貿易に関する諸事を学ぶためであった。

最近ドイツの産業界、商業界から、私の所に、日本の産業や商業に関する様々な問い合わせが届くようになった。そこで私は、それらドイツ側からの質問に答えるためにも、今やドイツ語の雑誌を創刊することが是非とも必要になったと考えている。

というのも、まず、ヨーロッパ人にとって日本語や中国語の新聞を正確に読むことは、何年もかけて一生懸命勉強した後でも、ほとんど不可能だからである。次に、東アジアに代理店を持たないドイツの貿易商や工場主にとっては、「東アジア・ロイド」(国際的に著名な大手の海上保険会社、汽船会社) のような所は別にして、唯一の資料は英語の新聞、雑誌のみなのだからである。

私は日本人として、日本に住んでいる外国人よりも以下の点において勝っている。まず私は、日本の様々な製品や日本人の能力、趣味などに関して、正確な知識を有している。次に、私は日本の財界、官界のトップクラスの人々との間に人脈を有しており、彼らは私の『Ost=Asien』の刊行を好意的に受け止めてくれている。それらの人脈を通じて、私はこの雑誌の予約購読者と広告主に対し、東アジア、特に私の故国日本との取引に関して、卓越した助言をすることができるのである。

私は、このような商業的な面のみではなく、政治、科学、芸術などの分野においても、著名な、

そして有能な協力者をすでに得ており、今後もその数を増やしていくつもりである。願わくは、幸いなる『Ost=Asien』の船出がなされ、この雑誌がヨーロッパと東アジアの間に、とりわけドイツと日本の間に、物質面においても精神面においても、活気のある交流を仲介する助けとならんことを。

玉井喜作

以上がドイツ語による創刊の辞である。内容については次の日本語版を見た後で、両者を比較していくことにしたい。

3. 日本語版創刊の辞

このドイツ語版の次の頁には、主に日本の読者を意識して、日本語による「本誌発行の趣旨」という文章が掲載されている。漢文調の日本語であるが、そのままここに書き写すと次のようになっている。⁶⁾ただしカタカナはひらがなに直し、漢字はできるだけ現代の表記に改め、必要に応じてルビを付けた。また原文は縦書で句読点が一切入っていないが、文意に応じて句読点をつけた。

本誌発行の趣旨

東西両洋の商業的關係は近年益々繁密に趣き、特に独逸は新興の商工業国として、其商品の販路を東亜の闊天地に拓めつつあり。而して之と同時に東亜の実業界は長夜の惰眠より覚破せられ、特に我大日本の如き、従来の受動的地位に安んぜずして自動的に世界の大市場に向かい、^{ただ}遂に其豊饒なる粗生品のみならず、漸く精巧なる工芸品をも輸出するの勢を呈したり。

然りと雖も、若し東西両洋の商業的關係を以て欧州諸国間のものに比せば、其幼稚にして且疎遠なりと謂いべき歟。此幼稚なるを^じ発達せしめ此疎遠なるを^{けだ}近邇せしむるの方策は、蓋し一にして足らずと雖も、東西洋人をして互に善く彼我の事情に通曉せしむるより急なるはなし。而して之が必須の機関は、欧文商工業雑誌の発刊に在り。

夫れ日本は近來此種の新聞雑誌に乏しからず。然れども、不幸にして其文辞は欧人の最も了解に若しむ所なり。是に於て敢て自から^し揣らす。進んで独文の月刊雑誌を発行し、名付けて東亜と称し、東西両洋間、特に其新興商業国間の交通に有効なる軌道航路を供給するを以て任とし、傍ら政治、社会、文学、美術の事項を網羅して、論説に批評に將た事実の報道に、一新生面を開かんとす。

明治31年3月 発行兼出版人

主筆兼責任記者 玉井喜作述

- 一 本誌は全世界至る所に購買者を有す故に、広告の効能は甚だ大なり。広告料は1頁前金25円、半頁同15円、4分の1頁同7円50銭。
- 一 本誌は前金受納後に非ざれば発送せず。本誌代価は1箇年5円、1部50銭。
- 一 本社は東洋に300社、独逸^{スイス}瑞に400社、その他世界各国に300社、合計1000の新聞雑誌社と新聞雑誌交換の予定なり。御望みの方は交換申し込みあれ。

以上が日本語版である。

4. ドイツ語版と日本語版の内容の比較

1) 人脈の形成

さて、この両者を比較してみると、要点は確かに同じである。つまり、日独の貿易を振興するためには両者が互いに知り合うことが必要なので独文の月刊雑誌を創刊した、ということである。しかしドイツ語版の方が比較的叙事的で、内容も詳しい。日本語版には、シベリヤ経由でベルリンにやって来たこととその目的、『Ost=Asien』の創刊にいたる具体的経緯、さらに、自分が日本の財界、官界のトップクラスの人々との間に人脈があることなどは書かれていない。ドイツ語版はドイツの企業向け、日本語版は日本向けということを意識した結果であろう。

いずれにせよ、この両方を読んでみると、この時点での玉井の気概は大いに感じられる。しかし、今後世界中の新聞雑誌社1000社との間で『Ost=Asien』を交換する予定であるとか、日本の財界、官界のトップクラスの人々との間に人脈があるなどの下りには、いささか誇大広告の感があるのは否めない。

それでいて、『Ost=Asien』の目次に沿ってこのような人脈に関係する記事をざっとながめていくと、確かに、当時ベルリンを訪れた財界、官界のトップクラスの人々との間に、人脈が次第に築かれていっていることがわかる。これには、大きく2つのことが関係しているものと思われる。一つは、明治時代のいわゆる長州閥に由来するものであり、今一つはベルリン大学の留学生に由来するものであろう。

まず前者について言えば、玉井喜作は、今の山口県光市の出身であり、長州の人間であった。既述のように、玉井がベルリンで『Ost=Asien』を発行していた時期のドイツ公使は、第一次伊藤博文内閣の外相を務めた井上馨の甥である井上勝之助であった。⁷⁾ またその前任者は、同じく長州出身の青木周蔵であった。伊藤博文も井上馨も長州人である。これはほんの一例に過ぎないが、その他にも陸軍軍人の長岡外史、大井菊太郎、河村正彦など、ベルリンの玉井家の『寄せ書き』に名前を残す人物には(pp.42-43参照)、今の山口県出

身者が多い。

また後者について言えば、玉井自身の東京大学医学部予備門時代の人脈や、ベルリン大学に留学してくる日本人との頻繁な交流が、このような人脈形成に大きな役割を果たしたと考えられる。ベルリン大学に留学してきた日本人は、日独の親睦団体であった和独会や、日本人の親睦組織である日本クラブによく出入りした。そして玉井はそれらの団体・組織の世話をよくして、自宅にも彼らをしばしば招いていた。このような所からも、次第に上記のような人脈が形成されていったのであろう。

2) 獨逸学協会学校

ところで獨逸学協会学校の存在は、前者の長州閥とも後者のベルリンの留学生とも、深く関連している。獨逸学協会の設立には、明治14年の政変後の、明治政府のドイツ志向への転換が深く関係していた。同協会設立の中心となった品川弥二郎、桂太郎、青木周蔵らは、すべて長州藩の出身である。

さらに、同協会がもととなって成立した獨逸学協会学校の同窓生の巖谷小波、芳賀矢一、盧百寿などは、ベルリンの玉井喜作家を訪問する常連であった。このように見ていくと、明治14年の政変、長州閥、獨逸学協会、獨逸学協会学校という流れは、ベルリンの玉井喜作に直接つながっていく。このことも、玉井喜作の人脈形成に大きく関与したものと思われる。

加えて玉井喜作自身、この学校とは深い関係があった。湯郷将和氏の『キサク・タマイの冒険』は、玉井喜作に関する初めての本格的な伝記であるが、その中に、玉井が1881年(明治14)の2月から11月に「東京府下私立獨逸学校」において学んだという記述がある。そしてこれが獨協大学の前身であると記されている。⁸⁾

実は、これに関しては筆者も目下調査中なのであるが、獨協大学の前身である獨逸学協会学校の設立は1883年(明治16)年の10月である。さらにそのもととなった獨逸学協会の設立でさえ、1881年9月18日である。従って玉井喜作が学んだという1881年には、獨逸学協会学校はまだ存在していなかった。しかし獨逸学協会学校の設立を願ひ出る1883年の公文書の中に、獨逸学協会委員長品川弥二郎の名前で、「私立獨逸學校設置願」という文書が残っている。⁹⁾

このような経緯を考えてみると、あるいは1881年に獨逸学協会が設立された時点で、すでに獨逸学協会学校の母胎となるような「私立獨逸學校」という名称のドイツ語の私塾があったのかもしれない。この点は、今後もう少し詳しく調査してみたいと考えている。¹⁰⁾

いずれにせよ、以上のように、一見すると向こう見ずと思われるような計画を立てながらも、場合によってはそれを実現してしまうところもあるのが、玉井という人物の一つの魅力なのかもしれない。もっとも、

若い頃の彼においては、そのような計画は失敗することの方が多かったのではあるが。

3) 『Ost=Asien』の値段と当時の物価

ところで日本語版には、『Ost=Asien』の購読料金と、同誌に掲載する広告の代金のことが書かれている。これによれば、『Ost=Asien』は1冊50銭である。当時の日本で、雑誌1冊の値段50銭とは、金銭感覚でどれくらいの感じだったのであろうか。当時の日本の物価を年表にした資料によれば、次のようなデータが残っている。

巡査の初任給が1897年(明治30)で9円、小学校教員の初任給が1900年(明治33)で10~13円、大学卒の銀行の初任給が1898年(明治31)で35円、高等文官試験に合格した大学卒の公務員の初任給が1894年(明治27)で50円、東京大学の年額授業料が1899年(明治32)で25円、総合雑誌の『中央公論』が1899年に1冊12銭、東京の町中で並の天井1杯が1900年に7銭、駄菓子屋のまんじゅう1個が1892年(明治25)に1銭という時代である。¹¹⁾また、当時西洋文化の窓口であった丸善のPR誌『學鐙』の値段は、1902年(明治35)に1冊10銭であった。¹²⁾

従って『Ost=Asien』1冊の値段は、『學鐙』の5倍、『中央公論』の4.2倍であり、1頁の広告料は、当時の東京大学の年額授業料と同じであった。また1年間契約して『Ost=Asien』を読もうとすれば、初任給10円の小学校教員は、月給の半分を一度に支払わなければならなかったわけである。

当時、ベルリンから輸入されたドイツ語の月刊雑誌を読むことのできた日本人は、やはり非常に限られていたであろう。当時は、『Ost=Asien』1冊を購入するよりも天井を7杯食べる方が有意義である、と感じた日本人の方が多かったのではないだろうか。

もっとも昨今の書籍雑誌の代金は、筆者が学生時代を過ごした35年前頃に比べると随分高くなった。このような時代に『Ost=Asien』を読み直してみると、100年前にベルリンで、毎月これだけの内容の雑誌をドイツ語で刊行したエネルギーを考えれば、当時の1冊50銭という値段も宜なるかなという感じがしないでもない。

当時の値段を現代のそれに換算することは、諸説あってなかなか難しい。しかし、このように当時の物価の中で比較してみると、およその感じはつかめるであろう。因みに玉井喜作の手帳によれば、この当時の1マルクは、同時代の日本円では約55銭にあたと記されているようである。¹³⁾また1900年(明治33)から1902年までベルリンに滞在した巖谷小波(季雄)は、その体験を綴った『洋行土産』の中で、当時の1マルクは日本円で約50銭にあたと書いている。¹⁴⁾為替レートには、日々多少の上下幅はあるが、一応当時の1マルクは同時代の邦貨で約50銭前後にあたるようである。

ある。

II. 玉井喜作追悼記事

1. 追悼記事

1) 初めての伝記

さて、以上のような意図を持って『Ost=Asien』を刊行し始めた玉井喜作とは、一体どのような人物であり、当時のベルリンの日本人社会及びドイツ人社会の中でどのような暮らしをしていたのであろうか。この点に関しては、近年湯郷将和、大島幹雄、新村俊武各氏の伝記などが続々と現れ、¹⁵⁾今ではかなりはっきりとした人物像が出来上がってきている。詳細はそれらに譲るとして、本稿では当時の息吹を伝える直接的な資料の中から、彼の人物像を振り返ってみたい。

それを伝える格好の資料は、彼の追悼記事であり、これは一番最初に書かれた玉井喜作の伝記でもある。¹⁶⁾彼は1906年9月25日に40歳で死去し、『Ost=Asien』も同年の9月号と10月号は休刊になる。そして翌11月号から老川茂信によって復刊されたのだが、その最初の号に掲載されたのがこの追悼記事である。これには筆者名が記入されていないが、この記事の最後に、購読者に対する「謹告」が老川茂信の名義で書かれていることから、彼が書いたものとみて間違いはない。

その意味でこの文章は、『Ost=Asien』の編集を見習いながら、玉井喜作の一番身近で暮らしてきた人物の書いた追悼の辞として、当時のベルリンでの玉井の様子を伝える基本的な資料と言える。以下その文章を紹介しておきたい。()内は筆者の補い、[]内は原文にある括弧である。

2) 玉井喜作追悼記事

故『Ost=Asien』主筆玉井喜作君

月刊誌『Ost=Asien』の前主筆玉井喜作は、1866年(慶応2)5月18日に、日本の山口県三井村(現光市)に生まれた。そして1906年(明治39)9月25日正午に、ベルリンのクラインペーレン通り9番地の彼の家で、(数え年)41歳を一期として安らかに息を引きとった。

玉井喜作は、言葉の真の意味での独立独行人であった。彼は1880年(明治13)以降東京大学(医学部)予備門(後の旧制第一高等学校)で学び(正しくは1882年入学)、2~3年後には、そこでドイツ語のための私立学校の創立を企てた。1887年(明治20)~1891年(明治24)の間は(正しくは1888年~1891年)、札幌農学校の語学教師(現北海道大学ドイツ語教授)として活躍した。

ここでの生活は満ち足りたものではあったが、

彼は外の広い世界への知識欲に駆り立てられた。そしてヨーロッパ文化、とりわけ世界貿易をその本場で学びたいと思った。だが彼は、快適な客室付きの汽船でインド洋やアメリカを経由していく普通の経路をとらなかった。彼は、ヨーロッパの中心であり最終目的地であるベルリンを目指して、シベリアとロシアを経由する流浪の旅をしていったのであった。

まず北海道から日本を縦断して下関まで行き、そこを1892年（明治25）11月17日に出発し、さらに朝鮮を経てウラジオストックまで行った。そこでは、彼はしばらくハンブルクの商社（本社がハンブルクにあるランゲリュッチェ商館）で働いた。それから茶の隊商とともに、当時まだ鉄道の無かったシベリアを経由して、ロシアにたどり着いた。

そしてついに、日清戦争開始の年に、ドイツ帝国の首都ベルリンにやって来た（1894年2月26日到着）。従って玉井は、20000kmの道のりを（原文の「2000km」は間違い）、約1年半かけて、ほとんど徒歩で進んで行ったのであった（もちろん実際には船、櫓、郵便馬車、鉄道などを利用してゐる）。

中でもイルクーツクからトムスクまでのおよそ1800kmの道のりは、最も興味深く、また最も緊張した困難な旅であった。彼はそれを隊商の櫓で、零下20～50度という凍り付くような寒さの中を、短い休息を取りながら30日間で踏破したのだった。〔この時の旅程の体験と感想を、玉井は『西比利亜征様紀行』（邦訳『シベリア隊商紀行』）に記している。〕

玉井喜作は、月刊誌『Ost=Asien』を1898年（明治31）に創刊したが、この雑誌は今までにすでに9巻まで刊行されている。その発刊以来、彼はベルリンのジャーナリズム界において、文筆家として、またドイツ語の月刊誌『Ost=Asien』の創刊者、編集者として、高い評価を得てきた。

玉井は非常に勤勉に昼夜の別なく働いたので、周囲は彼に休むこと、体をいたわることを説いて聞かせなければならないほどであった。彼はまたベルリン、シェーネベルガー河畔10番地にある日本クラブ〔これは当地の日本人のための集いの場である〕の創設者の一人でもあり、つい最近までこのクラブの運営に力を注いでいた。従ってこのクラブのメンバーは、決して彼の懸命な仕事ぶりを忘れないであろう。

また彼は、東アジアの商業、工業、学問を仲介する者として、その絶え間ない努力と創造を通じて、ヨーロッパに数多くの種子を植え付けていった。後の世代は、その種子の成長、開花、増殖を、

喜びと共に受け入れることになるであろう。

故人は生前、家族に対する誠実さと愛慕の念を、彼の故国の人の幸不幸に対しても、私利私欲無く自然に注いでいた。特に日露戦争の間は、傷病兵と戦死した兵隊の遺族のために、彼は迅速な救済行動をとった。そしてロシアを追われてベルリンにやってきた日本人達は、玉井の助力のおかげで、ドイツを経由して故国まで送り届けられた。また、故国日本の飢饉に対する彼の献身的な援助も、忘れることができない。

これらの功績に対して、玉井は日本赤十字社から特別社員賞のメダルを受領し、さらに愛国婦人会からは彼に友好賞のメダルが贈られた。他にもあらゆる立場、あらゆる人々から、数え切れないほどたくさんの感謝状が故人に贈られた。

9月28日（1906年 明治39年）に玉井の住居において、和独会、日本クラブ、そして多くの個人的な友人など、数多くの参列者の臨席のもとに盛大な葬儀が営まれた。ドイツと日本の友好団体である和独会の代表として、市参事会理事のDr.パウル・ブルン氏が、また玉井の故国日本からは（ドイツ）大使館付武官明石元二郎大佐が、たくさんの花で飾られた故人の柩の前で、それぞれ敬意に満ちた追悼の辞を述べた。

立派な葬儀が終わった後、夕方の5時に、遺体は（ハンブルクでの）火葬のためにレールテル駅に移された。その際故人の家族以外にも、友人、知人からなる多くの人々が駅まで柩に付き添って行った。ベルリン在住の日本人は、ほとんど全員が参加して、礼砲とともに柩に最後の別れを告げた。またドイツの知人の多くは、故人になお最後の別れの言葉を伝えるためにここに姿を見せた。

彼の同胞の人々から贈られたたくさんの高価な花の中でも、百合と白いバラの立派な花束が、ひととき目立っていた。それは、日本の国旗の色である白と赤の絹のリボンで束ねられていた。さらに日本クラブの特別に大きな花輪、棕櫚の葉、月桂冠の花輪など。また多くのドイツ人が、それらのもとにたくさんの花を添えた。柏村Y.と老川茂信は、ハンブルクまで柩に随行した。

安らかに憩いたまえ！

なおこれに続いて、同じページの下段部分に、老川茂信の次の文章が掲載されている。

謹告

最近、旅行や引っ越しなどでご住所を変更された方は、その旨ご通知お願いいたします。臨時ニュースなどをお知らせいただけると大変有り難

く思いますし、あらかじめ厚くお礼申し上げておきます。

敬具

老川茂信 月刊誌『Ost=Asien』編集者
ベルリンSW.11 クラインペーレン通り9番地

2. 追悼記事めぐって

1) ジャーナリスト向けの性格、献身的行為

以上が追悼の辞である。年号の間違いなどは何箇所もあるが、それでも当時のベルリンの日本人社会、およびドイツ人社会の中での玉井喜作の生き様がよく伝わってくる。この文章の最初の所(「彼は外の広い世界への知識欲に駆り立てられた……短い休息を取りながら30日間で踏破したのだった」)は、玉井喜作の『西比利亜征伐紀行』(『シベリア隊商紀行』)の序の部分からの引用であり、ほぼ同じ内容の文章である。¹⁷⁾

この追悼記事を読んでもみると、玉井喜作は、一箇所に落ちていて何かをじっくりと研究するというような学者タイプの人間ではなく、何にでも強い好奇心を向けるジャーナリスティックな性格の持ち主だったようである。従って、ベルリンでの『Ost=Asien』の編集・出版の日々は、忙しくはあったが、彼にとっては短い人生の中で最も充実した時期であったのだろう。

また玉井喜作は、他人のために何らかの援助をすることや、故国のために何かを行うことに対しては、並々ならぬ意欲を持っていたようである。もちろんこの文章の弔辞という性格上、何割かは差し引いて受け取る必要はあるが、日露戦争当時の『Ost=Asien』には、戦死した兵士の遺族の救済を呼びかける記事や、義援金、寄付金を募る記事がしばしば表れる。

筆者の手元にある玉井喜作関係の書類の中に、当時の日本赤十字社長松方正義からの弔辞もあり、次の文章が大きな字で厚手の和紙(A4版を横に2枚つないだサイズ)に綴られている。「本社ハ特別社員玉井喜作氏ノ遠逝ヲ聞キ哀悼ノ情ニ堪エス爰ニ社員百貳拾餘萬人ニ代リ弔詞ヲ贈ル 明治三十九年九月三十日 日本赤十字社長伯爵松方正義」

2) 平均寿命、火葬と土葬

彼の享年に関して言えば、数え年41歳で亡くなったというのは、確かに現在の感覚からすると、非常に若くしてという感が強い。しかし当時の平均寿命からすれば、それほど若すぎる死でもなかったとも言えるのである。

というのも、日本人の平均寿命は1891~1898年(明治24~31)は男42.80歳・女44.30歳、1899~1903年(明治32~36)は男43.97歳・女44.85歳、1909~1913年(明治42~大正2)は男44.25歳・女44.73歳であり、平均寿命が50歳を越えるのは第二次世界大戦後なのである。¹⁸⁾とは言うものの、このような破天荒な人生を送った人間と共に生き、しかも異国の地でいきなり生活の

支えを失った妻子は、やはりやりきれない思いをしたことであろう。

なおキリスト教の葬儀は従来土葬であり、教会が埋葬に関する権限も持っていた。しかし西ヨーロッパでは、ほぼ18世紀後半頃より政府がその権限を教会から取り上げていき、19世紀に入ると少しずつ火葬も増えていった。現在ベルリンでは約40%が火葬であり、プロテスタントの多いハンブルクでは60%が火葬となっている。しかしドイツ全体を見ると、今日でも火葬はまだ40%足らずであり、土葬の方が多い。100年前には、火葬はもっと少なかったであろう。

玉井喜作の葬儀の後、ベルリンのレーテル駅から、わざわざ250kmも離れた遠くのハンブルクまで柩が運ばれていったのは、火葬を行うためであった。250kmと言えば、地図上の直線距離で東京と愛知県岡崎市の距離に等しい。当時は、ベルリンにはまだ火葬の施設がなかったのであろうか。この葬儀の22年後の1928年に、ベルリンには80の公営墓地と、3つの火葬場があったということである。¹⁹⁾ベルリン全体に火葬場が3つのみというのは、仏教が主で火葬が中心の日本に比べれば、やはり非常に少ない。

III. 老川茂信のこと

1. 『Ost=Asien』まで

1) 経歴

ところで、この追悼記事を書いた老川茂信は、この時24歳である。老川については不詳の部分が多く、後日稿を改めて詳しく言及する予定であるが、とりあえず現在わかっている限りでの情報を整理しておきたい。

『Ost=Asien』の創刊10周年を記念して、通巻No.121号(1908年)に、彼の経歴が簡単に次のように記されている。「現在の主筆、編集者である老川茂信は、1883年(明治16)1月5日に富山県で生まれた。東京の郁文館中学(現郁文館学園中学校・同高等学校)を卒業後、明治法律学校(現明治大学)に通い、1903年~1906年の間はベルリン大学で学んだ。彼の前任者玉井の死後、彼はこの事業を引き継いでいる」。²⁰⁾

この記事には筆者名がない。しかし、これはおそらく老川自身が書いたものと思われる。ただしハルトマンの名簿によれば、老川のベルリン大学在籍期間は1904年冬学期から1907年夏学期までとなっており、専攻は法学と記されている。²¹⁾従って彼の在籍は、正式には1904年9月頃から1907年8月頃までとなる。開始時期の1903年というのは、その頃からすでに、ベルリン大学に出入りはしていたということであろうか。

2) ベルリンの老川茂信

いずれにせよ、彼がベルリン大学にいた1903年頃から1907年頃までとえば、『Ost=Asien』の刊行時期と

重なっている。すなわち『Ost=Asien』は、その5年間に通巻No.58号からNo.114号までが刊行されている。この時期老川は、大学に通いながら『Ost=Asien』の刊行を手伝い、玉井喜作没後は24歳の若さでそれを引き継ぎ、No.102号からNo.139号までの編集長を務めたことになる。

老川茂信の住んでいた場所は、上記のハルトマンの名簿によれば、ベルリン西35区シェーネベルガー河畔10番地(W.35, Schöneberger Ufer 10)であり、これは実は日本クラブの住所でもある。²²⁾ということは、老川はこの日本クラブに下宿しながら、あるいはそこで書生的生活を送りながら、ベルリン大学に通っていたということであろうか。

次に、『Ost=Asien』の中にある老川茂信関係の記事を見てみよう。通巻No.98号(1906年)に、日本国内の飢饉に対するベルリンからの義捐金の記事がある。そこでは老川茂信は10マルクを寄付したことが記され、所属はベルリン大学医学部となっている。²³⁾法学部を主としながら、一時期医学部にも在籍したのであろうか。この時期は、老川自身が『Ost=Asien』の刊行に補助的ながら関わっている時なので、おそらくこの号の校正には彼も加わっていたであろう。従ってこの記述は信頼できると思われるのだが。

また通巻No.125号(1908年)の裏表紙には、老川の富山の実家の住所が載っており、「富山県西砺波郡西野尻村字興法寺 老川正行」となっている。これは、『Ost=Asien』の購読料や広告料を日本から送金する場合にはこの住所に送付を請うという文脈の中で書かれたものであり、老川正行は彼の父親の名前である。²⁴⁾この住所は現在の小矢部市にあり、興法寺は、北陸自動車道の砺波インターチェンジと小矢部インターチェンジのちょうど中間あたりに位置している。

3) 『Ost=Asien』復刊の辞

既述の玉井喜作追悼記事が掲載された通巻No.102号(1906年11月号)には、老川が玉井の後を引き継いで『Ost=Asien』を刊行し続ける旨のことが、223ページにドイツ語で、224ページに日本語で、それぞれ書かれている。ドイツ語版の方は、特許関係業務の引き継ぎなど営業に関する具体的な内容が主であるが、²⁵⁾日本語版の方は、日本人向けに下記のように書かれている。²⁶⁾

原文は縦書。漢字はできるだけ現代の表記に改め、カタカナはひらがなに直し、必要に応じてルビを付けた。また原文には句点が4箇所記されているのみであるが、文意に応じて句読点を書き加えた。またこの時活字が無かったのか、「事」に当たる漢字が「亊」になっているが、その2箇所は「事」に直した。なお「迄」は「迄」に直した。

拝啓

各位益々御清福之段奉大賀候。陳者今迄御講読

を辱うせし月刊雑誌東亜は、主筆玉井喜作氏死去致され候為永々休刊致居候處、愈々今月より再び小生主筆となり発行仕るべく候間、何卒以前の通り御引立御講読あらん事を偏に奉願候。

扱て、今後は益々在欧日本人諸君の為便宜を御計り可申候、又一方に於ては目下世人の注目する東亜天地の紹介者となり、特に我が日本帝国の為に飽まで盡すべき考に御座候間、何卒宜しく御賛助あらん事を奉希望候。

尚、今迄雑誌新聞御交換に相成り居候方は、何卒今後も以前の通り御交換相成度。又之迄続いて東亜紙上に御掲載被下候広告は、当分取消の御通知ある迄元の如く掲載致し置き申候間、何卒左様御承知被下度候。

東亜雑誌代にて既に故玉井氏に9年度分御払済みに相成候方へは、小生より続いて雑誌御送り申すべく、又今迄雑誌代御払いにならざる方へは、玉井未亡人エツ子氏、或いは小生より、一先計算書御送り申すべく候間左様御思召被下度候。而して今後雑誌代は可成前金にて御払込被下度奉願候。先は右御披露旁御報告申上候。

頓首

明治39年11月26日

ドイツ国ベルリン市クラインペーレン街9番地
月刊雑誌「東亜」主筆 老川茂信

諸君よ、諸君が蛍雪の功になりし宝富する学識を広く世界に発表せんと欲すれば、宜しく我が雑誌に御投稿あれよ。

以上が、『Ost=Asien』引き継ぎに関する彼の意志を伝える文章である。編集の見習い時代があったとはいえ、24歳の青年が『Ost=Asien』を引き継ぎ、その後3年余りも刊行し続けたということには驚かされる。もちろん、男性の平均寿命が44歳ほどであった時代の24歳を、それが77.8歳(2002年)になった現在の24歳と比較しても、あまり意味は無いに違いない。

単純に比率計算をすれば、当時の24歳というのは、今で言えば40歳をちょっと越えたあたりになるわけであるが、それにしても、明治時代の人間は何とも早熟でしっかりしたものであったと痛感させられる。なおこの文章を読むと、雑誌の購読料を完全に支払っていないものもいたことがわかる。

2. 『Japan und China』以降

1) 山田耕作?

さて、『Ost=Asien』は通巻No.139号1910年(明治43年)2月号(12巻7号)が最終号となった。老川茂信は、その後2ヶ月の休刊をはさんだ後、同年5月から誌名を『Japan und China』(日清月報)と変更し、

これを『Ost=Asien』の後続誌として刊行していった。さらに、1912年(明治45・大正1年)には清が滅び中華民国が成立したので、1912年8月号にあたる通巻27号(3巻3号)からは、日本語の誌名を変更し、『Japan und China』(日華月報)としている。

この雑誌は、現在日本では、東京大学と岩手大学に部分的に所蔵されているのみである。両大学で所蔵を確認したところ、基本的には月刊であるが、40号までに4回の合併号が出されている。そして1913年(大正2年)の11月・12月合併号が通巻No.40号(4巻4号)となっており、これが最終号のようである。翌1914年7月からは第一次世界大戦が始まり、この戦争では日本はドイツと敵対することになった。従って、日本人がベルリンで独文の月刊雑誌を刊行することは、もはや不可能になったものと思われる。戦争の終結は1918年(大正7年)11月であった。

この『Japan und China』の刊行された時期、1910年(明治43)～1913年(大正2)は、35ページの年表に見られる通り、実は作曲家の山田耕作(1930年12月に耕筰と改名)がベルリンに留学していた時期とちょうど重なっている。ウンター・デン・リンデンを歩いて、書店に並んでいる『Japan und China』のタイトルに引かれ、山田耕作もふとそれを手に取ったことがあったかもしれない。

2) 2つの新たな手がかり

さて以上のように、老川茂信の足跡は1913年12月で途絶えていたのであるが、最近その後の手がかりを2つ得た。一つは1927年(昭和2年)出版の講演会の記録であり、今一つは1929年(昭和4年)に掲載された新聞記事である。詳しくは後日改めて報告する予定であるが、以下簡単に紹介しておきたい。

前者は、『財団法人啓明会第22回講演集 老川茂信「獨逸の近況」』として、啓明会事務所から1927年11月30日に発行されたものである。これは同年7月9日に、老川茂信が東京丸の内にある日本工業倶楽部で講演した内容を、そのまま収録し出版したものである。司会者が冒頭の講師紹介の所で、「老川君は……此度23年振りで帰朝せられたのでありまして」と述べている。また講演冒頭では老川が、「東京に顔を出したのは最近でございますが内地に帰りましたのは昨年の年末でございます」²⁷⁾と述べている。

この話を総合すると、老川は1926年の年末に23年振りで帰国し、1927年になって東京に出かけたということになる。従って老川の渡独は1903年となり、既述の『Ost=Asien』通巻No.121号(1908年)の彼の経歴、「1903年～1906年の間はベルリン大学で学んだ」という記述と合致する。

つまり老川は、第一次世界大戦の間もその後も、ずっとヨーロッパに滞在しており、1926年の年末(大正15年か昭和1年かは不明)にやっと帰国したということ

がわかる。ただし、この講演集からは、その間(1914年1月～1926年12月)具体的にどこで何をしていたのかを読みとることはできない。

今一つの足跡を伝えるものは、『大阪朝日新聞』1929年(昭和4年)6月13日の記事、「都会生活を慰める愉快な『園亭植民地』」である。これは老川茂信の署名入り記事である。「日曜終日を真っ黒で畑いぢり～ベルリン郊外の小農園の話」という副題が示すように、これは、ベルリンの都会生活者が、日曜に郊外の小さな賃貸農園で汗を流しているという内容の文章である。

以上の2つが、最近の調査でわかった老川茂信の足跡である。今後も『Japan und China』のことや、大正年間以降の彼の足跡に関して、子孫の方々などを訪ね、さらに詳しく調査してみたいと思っている。

IV. 『Ost=Asien』の編集室所在地

1. 玉井喜作のベルリン時代の年譜と地図

1) 玉井喜作略年譜

さて、『Ost=Asien』の編集室は同時に玉井喜作の住居でもあった。ここでまず、玉井喜作のベルリン時代を中心とした年表を作成してみよう。彼が日本を出発してベルリンに到着し、『Ost=Asien』を創刊して40歳で亡くなるまでを年表にしてみると、次のページのようになる。

これは湯郷将和『キサク・タマイの冒険』の年表²⁸⁾をもとに、筆者の調査結果を付け加え、さらに当時の国内国外情勢、及び当時の日本の音楽界の様子を書き加えたものである。なお東京音楽学校(東京芸術大学音楽学部の前身)は、1893年(明治26)から1899年(明治32)の期間は、高等師範学校付属音楽学校となっている。しかしこの年表では、記入スペースの関係もあり、東音(東京音楽学校の略)と記した。

2) 地図

次に、この年表の中に出てくる地名、すなわち玉井喜作のベルリン大学在籍時の住所、『Ost=Asien』編集室の3つの住所、印刷所の住所などを中心として、ベルリンで玉井喜作が居住した近辺の地図を、p.36に記した。以下、この年表と地図を参照しながら、玉井喜作のベルリンでの足跡を実際に訪ねてみよう。

2. 1999年のベルリン調査

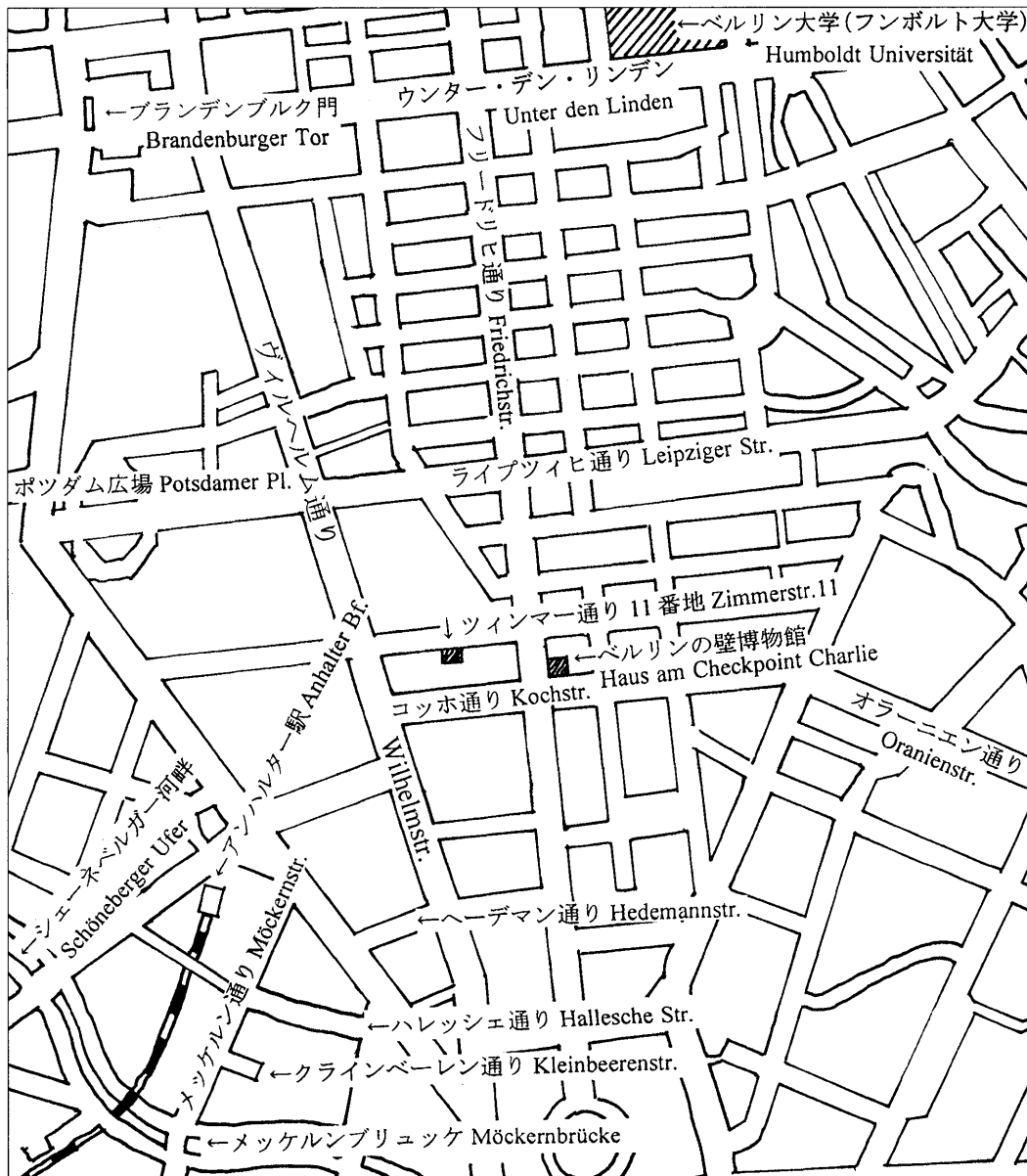
1) 『Ost=Asien』編集室の変遷

さて『Ost=Asien』には、毎号の目次の部分に、同誌の編集室の所在地が記してある。この住所は、同誌の発行事務所でもあり、また玉井喜作の住居でもあった。それによると、全139号の編集室の所在地は3箇所あり、36ページの地図の下に記したように変遷している。参考までに、玉井喜作と老川茂信の年齢も並記しておいた。これは両者の満年齢である。

玉井喜作：ベルリン時代の年譜

西暦	年号	歳	月/日	玉井喜作一家の出来事	音楽界・国内国外情勢
1866	慶応 2	0	5/18	玉井嘉吉の三男として誕生	
1892	明治25	26		cf. 2/11福島安正中佐騎馬でベルリン発 6/12同ウラジオストック着	幸田延ボストン留学 1889-1890 幸田延ウィーン留学 1890-1895
			11/17	山口県下関港を出航し釜山へ向かう。	
1893	明治26	27	12/7	イルクーツク発	
1894	明治27	28	1/5	トムスク着、2/20モスクワ、2/21ペテルブルク	日清戦争1894-1895
			2/26	ベルリン着	滝廉太郎東音（東京音楽 学校）に入学
			3/2	ハンプルク着	
			3/7	同地マース商会に就職（日本・中国品の販売店）	
1895	明治28	29		1895年夏学期ベルリン大学法学部に在籍 1895年冬学期同大学同学部に在籍	4/17日清講和条約 幸田延帰国し東音教授
1896	明治29	30		1896年夏学期同大学同学部に在籍	幸田幸東音卒業
1897	明治30	31		住所Hedemannstr.11	日本楽器製造㈱設立
1898	明治31	32		『西比利亜征伐紀行（シベリア隊商紀行）』出版	滝廉太郎東音卒業
			3/15	『Ost=Asien』（東亜）創刊 編集室住所 SW.12, Berlin, Zimmerstr.11 印刷所Otto Elsner社住所S. Oranienstr.141	
1899	明治32	33		編集室住所SW.46, Berlin, Halleschestr.13へ転居	幸田幸ベルリン留学 1899-1903
1900	明治33	34			義和団事件1899-1901
1901	明治34	35	11/17	川上貞奴、川上音二郎など玉井喜作宅訪問	滝廉太郎ライブツィヒ留学 1901-1902
1902	明治35	36	6/1	玉井エツ・韶子・文子横浜出発ドイツへ向かう 編集室住所：SW.11, Berlin, Kleinbeerenstr.9へ転居	島崎赤太郎ライブツィヒ留学 1902-1906
			7/21	玉井エツ・韶子・文子マルセイユ着	
			8/8	玉井エツ・韶子・文子ベルリン着	10/17滝廉太郎帰国
1903	明治36	37		『P.F.von ジーボルト 最終日本紀行』発刊	幸田幸帰国し東音教授 6/29滝廉太郎没
			11/16	四女喜代子誕生	
1904	明治37	38			山田耕作東音入学
1905	明治38	39	9/15	次女韶子手術	日露戦争1904-1905
			10/17	次女韶子死去	9/15ポーツマス条約
1906	明治39	40	5/11	長男太郎誕生	6/29島崎赤太郎帰国
			9/25	玉井喜作死去	
			9/28	玉井喜作葬儀	
			11月	『Ost=Asien』通巻No.102号老川茂信により復刊	
1907	明治40		2/21	東京・上野・精養軒で玉井喜作追悼会	松島 ^{つね} 彝東音入学
1908	明治41				山田耕作東音卒業
1910	明治43		2月	『Ost=Asien』通巻No.139号最終号 以後『Japan und China』（日清月報・1912年からは 日華月報）と改題して老川茂信が継続発行	山田耕作ベルリン留学 1910-1913 第一次世界大戦
1913	大正 2			『Japan und China』通巻No.40号が最終号か	1914-1918
1924	大正13			ベルリン商工会議所前に玉井喜作の肖像設置	池内友次郎パリ留学
1927	昭和 2		7/9	老川茂信講演「獨逸の近況」（於東京	1927-1933, 1934-1936

玉井喜作：ベルリン時代の地図



- No. 1～15号 玉井喜作 32歳～33歳
1898年4月号～1899年6月号
ベルリン南西12区ツインマー通り11番地
SW.12, Berlin, Zimmerstr.11
- No.16～52号 玉井喜作 33歳～36歳
1899年7月号～1902年7月号
ベルリン南西46区ハレッシェ通り13番地
SW.46, Berlin, Halleschestr.13
- No.53～101号 玉井喜作 36歳～40歳
1902年8月号～1906年8月号
ベルリン南西11区クラインペーレン通り9番地
SW.11, Berlin, Kleinbeerenstr. 9

- No.102～139号 老川茂信 24歳～28歳
1906年11月号～1910年2月号
ベルリン南西11区クラインペーレン通り9番地
SW.11, Berlin, Kleinbeerenstr. 9

この住所表記の内、「Berlin」の前に書いてある「SW」は、行政に関する区名記号である。1900年のベルリン市の地図を見ると、方角を示す8つの略語と中心部を示す記号C (Center, Zentrum) で、市内が大きく9つの地区に分けられている。²⁹⁾方角の略号は次の8つである。N (北)、NO (北東)、O (東)、SO (南東)、S (南)、SW (南西)、W (西)、NW (北西)。

つまりSWは「南西」地区の略号である。中心部を示す記号Cが記入してあるのは、ベルリンの旧市街にあたるニコライ地区からマリーエン教会、そしてベルリン大聖堂のあたりであり、この地域が当時のベルリンの中心であったことがわかる。

2) 3つの編集室

①クラインペーレン通り・ハレッシェ通り

さて、筆者は1999年の6月11日に、当時住んでいたボンからベルリンに向かって旅立った。これら3箇所の編集室のあった場所やベルリン大学など、玉井喜作の足跡を訪ねることが目的であった。

ボン駅で、朝7時51分発のドイツの新幹線に乗ると、昼12時36分にはベルリンに着いた。ケルン－ハノーファー経由で4時間45分の旅であった。昔の西ベルリンへの入り口であったツォーローギッシャー・ガルテン駅で降り、予約していたクーダム通りのホテルに荷物を置いて、さっそくベルリン探訪に出かけた。以下の写真の内、42ページの写真11と44ページの写真12と46ページの写真13以外は、すべて筆者が撮影したものである。

ツォーローギッシャー・ガルテン駅から100番という路線バスに乗ると、ベルリンの名所旧跡の前をうまく通りながら、ブランデンブルク門まで連れて行ってくれる。しかし、この日は地下鉄を利用した。ホテル前から地下鉄15番線に乗り、メッケルンブリュッケ駅(36ページの地図の左下)で下車した。ここから北東に向かって半径1kmほどの地域が、玉井喜作の学生時代の住居や、『Ost=Asien』の編集室があった場所である。

編集室の開設時期から言えば順序は逆になるが、最初に、同駅から徒歩5分ほどの所のクラインペーレン通りに着いた。下の写真1は、メッケルン通りの側からこの通りを写したものである。右側が官庁風の建物、左側は鬱蒼と木の生い茂った公園となっており、当時の面影を示すものは何も残っていなかった。100メートル足らずの短い通りである。



写真1 クラインペーレン通り

次に、そのすぐ隣のハレッシェ通りに行った。下の写真2がそれである。この写真も、メッケルン通りの側から写したものである。右側が、先ほどのクラインペーレン通り側から続く公園、左側は郵便局となっており、ここにも昔の面影は残っていなかった。この郵便局は、今は使用されていないようで、壁に弾丸の跡と思われるかなりの数の傷痕が残っていた。

『Ost=Asien』の通巻No.16～52号がハレッシェ通り13番地で、そして同じく通巻No.53～139号がクラインペーレン通り9番地で出版されている。従って、『Ost=Asien』のほとんどは、この隣り合った2つの通りで刊行されたことになる。



写真2 ハレッシェ通り

ところで斎藤茂吉の義父である斎藤紀一は、ドイツ留学のために1900年(明治33)11月17日に日本を出発した。帰国は夏目漱石と一緒に船で、1902年(明治35)12月5日であった。

ハルトマンのベルリン大学在籍名簿によれば、斎藤紀一は、1901年夏学期から1902年夏学期まで医学部に在籍し、住所はハレッシェ通り1番地(Hallesche Str. 1)となっている。³⁰⁾一方、茂吉の子供の斎藤茂太によれば、当時の住所は「ハレセ・シュトラッセ10の2番地」³¹⁾と記されている。住所はどちらかが誤記なのであろう。おそらくハルトマン名簿の方が、1ではなくて10の間違いではないかと思われる。いずれにせよ短い通りなので、この時期斎藤紀一は、玉井喜作のすぐ側に住んでいたことがわかる。

②アンハルター駅・ヘーデマン通り

この2つの通りから、歩いて5分もかからないところにアンハルター駅がある。現在使われているのは、Sバーン(都市近郊電車)のアンハルター駅である。地上に残っているのは、次のページの写真3のように、第二次世界大戦で破壊されたままの駅舎の一部のみである。

かつてアンハルター駅は、大都市ベルリンの中央駅とも言えるものであり、長距離列車のターミナル駅で



写真3 アンハルター駅

あった。従って玉井喜作が住んでいた頃には、このハレッシュ通りとクラインペーレン通りは、駅前の繁華街でにぎやかな所であったと思われる。ウンター・デン・リンデンの一带が、上品な山の手とすれば、アンハルター駅周辺は、いわゆる下町的な雰囲気のある所だったのでないだろうか。

このアンハルター駅から、東の方向に5分程歩いた所にヘーデマン通りがある。ここは、玉井喜作がベルリン大学に在籍していた時に住んでいた場所である。ハルトマンのベルリン大学在籍名簿には、玉井喜作は、1895年夏学期から1896年夏学期まで法学部に3ゼメスター在籍したとの記録が残っている。住所はヘーデマン通り11番地となっている。³²⁾この場所にも行ってみたが、ここには下の写真4のように、新しい高層アパートが建ち並んでいた。



写真4 ヘーデマン通り

ここは、ハレッシュ通りとクラインペーレン通りからも、歩いて5分程の距離である。このあたりに土地勘ができたために、『Ost=Asien』の編集室兼住居もこの近辺に置いたのであろう。

③ ツインマー通り

さて、次に行ったのがツインマー通りであった。なんとここには、『Ost=Asien』の編集室のあった建物が残っていた。ここも、アンハルター駅から歩いて800mくらいの所なので、それほどの距離ではない。徒歩10分足らずである。ヴィルヘルム通りからこの通りに入っていくと、右手に11という表示のある、何とも古い建物が残っていた。下の写真5がそれである。次の写真6はその入口の写真である。



写真5 ツインマー通り11番地

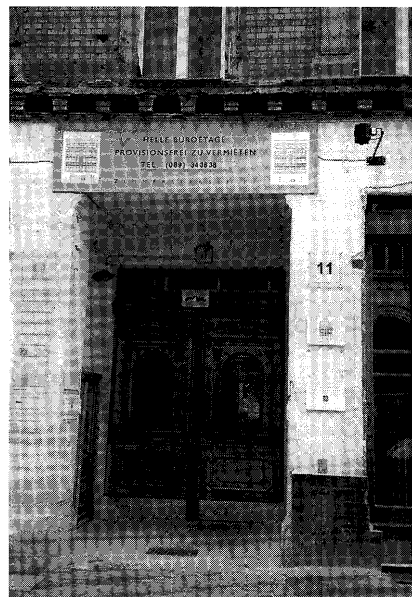


写真6 11番地の建物の入り口

『Alt-Berliner Photoalbum』(昔のベルリンの写真

集)というアルバムがある。これは、1870年代から1945年までのベルリンの歴史を伝える写真集である。この中には、第二次世界大戦時のベルリン空襲の様子が掲載されている。³³⁾これを見ると、かなりひどい状況である。しかし日本と違って、建築素材に石や煉瓦が使われている場合が多いため、奇跡的に焼け残っている部分も見られる。このツィンマー通り11番地の建物も、被害を受けながらも、そのようにして奇跡的に焼け残り、それを修復したものであろう。

玉井喜作の伝記の著者で産経新聞社の新村俊武氏が、2001年6月の渡欧時にこの建物の歴史を調査されたところ、この建物は1848年に建てられたものであることがわかった。³⁴⁾従って『Ost=Asien』は、まさにこの建物の中で創刊されたことになる。通巻No. 1～15号までが、ここで刊行されている。

筆者が最初に行った1999年6月の時には、この写真通りの外観であったが、2度目に行った同年9月には外壁の塗り替え作業中であった。現在はすっかり新しい装いを呈している。従って今になってみると、この6月の時の写真は貴重な記録となっている。

④ドイツと日本の建設工事の違い

筆者が調査に行った1999年と言えば、1989年のベルリンの壁崩壊からちょうど10年後であり、同年秋にはベルリンで様々な記念行事が行われていた。しかし、壁が崩壊して10年経った時ではあったものの、この当時のベルリン、特にブランデンブルク門からポツダム広場あたりを歩いてみると、まだ壁の撤去後の再開発が進行中というところであった。ポツダム広場の再開発がほぼ完了したのは、今年(2004年)の6月頃である。

筆者が訪れた当時の旧東ベルリン側、特に森鷗外記念館のあるマリーエン通りのあたりは、何本ものクレーンが林立しており、あちこち工事中という感じであった。ベルリンの再開発がなかなか進まなかった背景には、もちろん経済的、政治的ななど様々な要因があったのであろう。

ボンに1年近く住んでいて感じたことであるが、ドイツでは、一時的な建物の建設は非常に早い。イースターやクリスマスなどの折には、旧市街の広場に、売店用の数多くの小さな建物やメリーゴーラウンドなどがあつという間に作られる。ある朝買い物に出かけたら、もうクリスマス・マーケットができあがっていたという感じである。

そして広場の使われ方も実に多彩である。ボンのミンスター広場では、夏には子供用の小さなサッカー場が作られていた。またベートーヴェンの生家に近い別の広場では、冬休みには小さなスケート場も作られていた。そしてまた、このような急ごしらえの建物などの撤去も、実に迅速に行われる。

それに比して、恒久的な建築物を造る際の工事のテ

ンポは、日本のそれに比べるとかなり遅い。これには、建設工事の方法の彼我の相違や、³⁵⁾ドイツ人の勤労態度³⁶⁾なども関係しているのであろう。いずれにせよ、この恒久的な建築物を造る際の工事のテンポの遅さも、ベルリンの壁周辺の再開発の遅延に多少は関係があるのではないと思われる。もっとも、日本の建設工事が少し早すぎるのかもしれないが。

⑤チェックポイント・チャーリー

ところで、このツィンマー通り11番地の建物の前を、さらに東側に2分程歩いて行ったところの交差点が、ベルリンの壁があった時代の検問所、チェックポイント・チャーリーであった。p.36の地図に示したように、この交差点の南東の区画の一部にある建物が、今はベルリンの壁博物館になっている。下の写真7がそれである。



写真7 ベルリンの壁博物館

第二次世界大戦後、このツィンマー通りの上にはベルリンの壁が築かれていた。この壁は1989年に崩壊したので、筆者が行った1999年には、このツィンマー通りは普通の車道になっていた。以前から気になっていたのは、この11番地の建物と壁とが、具体的にどのような位置関係にあったのかということであった。

しかし、最近読んだ三宅悟『私のベルリン巡り』の中に、そのことが非常にわかりやすく書かれていた。³⁷⁾それによれば、この通りの車道の南側の端に、すなわち11番地側の歩道に沿って、車道の端に壁が築かれていたのであった。従って11番地側の、この南側の歩道部分は、壁があった当時は、壁と建物との間の狭い路地になっていたのである。西側から来てチェックポイント・チャーリーの交差点を左折すると、この路地に入るようになっていた。第二次世界大戦後も、この建物が再開発によって取り壊されることがなかったのは、そのせいであろう。

⑥ウンター・デン・リンデンとベルリン大学

このベルリンの壁博物館から、北に向かって約1kmばかりフリードリヒ通りを歩いて行ったところ

が、ベルリンのメイン・ストリートであったウンター・デン・リンデンの通りである。下の写真8は、この通りの端にあるブランデンブルク門から、ジーゲスゾイレ（戦勝記念塔）のある西の方向（6月17日通り）を見たものである。

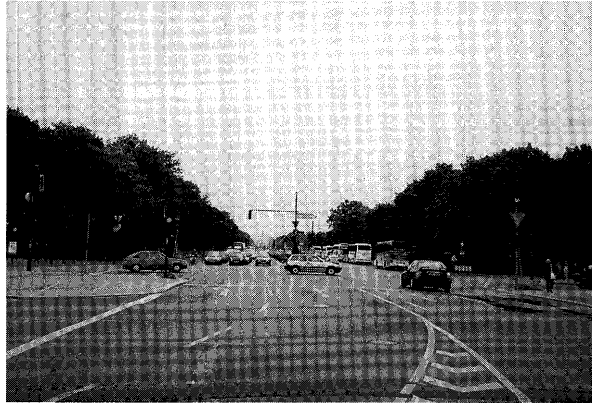


写真8 ブランデンブルク門から見た6月17日通り

幕末から明治初期にかけて、日本人は幾度かベルリンを訪れ、このメイン・ストリートを歩いている。1862年（文久2）の竹内下野守保徳一行の使節団が見たのは、ドイツ統一前のプロシア王国の時代であった。³⁸⁾明治維新直後の岩倉使節団が訪れた1873年（明治6）には、ドイツも国家統一（1871年）後2年を経過したところであった。³⁹⁾それぞれの機会における日本人のドイツ観、ベルリン観は、刻々と変化していく互いの国の発展状況を反映していて興味深い。

『Ost=Asien』通巻No.13号（1899年・明治32）のこの記事、「ベルリン宮廷への最初の日本使節」には、この1862年の竹内下野守保徳の使節団がベルリンの宮廷を訪れた時の様子が記されている。⁴⁰⁾これは、記事の後半に、『プロシア王宮儀典書』（ベルリン、1877）の中のこの時の記録（同書pp.58-63）を引用して、その様子を伝えたものである。

森鷗外は、1884年（明治17）から1888年までドイツに留学し、帰国後、1890年（明治23）に『舞姫』を発表した。宇佐美濃守はそれをドイツ語に翻訳し、『Ost=Asien』に全12回（1908年-1909年）にわたって発表した。その冒頭に描かれたウンター・デン・リンデンの様子は、昨年の拙稿で紹介した通りである。⁴¹⁾

玉井喜作がベルリンに着いたのは、森鷗外の10年後の1894年（明治27）であった。短いハンブルク時代も含めて、1906年（明治39）に亡くなるまで、彼は12年間をベルリンで過ごし、ベルリン大学にも在籍（1895～1896）している。この時期のベルリンは、ドイツが特に急速な発展を遂げた19世紀最後の四半世紀の首都であり、1875年に約96万を数えた人口は、1910年には207万に達していた。

①シェーネベルガー河畔・オラーニエン通り

ついでながら、ハレッシェ通り及びクラインペーレン通りから、西の方向に約600mばかり行った所から、シェーネベルガー河畔の通りが始まっている。このシェーネベルガー河畔10番地が、既述のように日本クラブの所在地であり、老川茂信の下宿でもあった。この場所は、現在は下の写真9のように公園になっており、当時の面影は何も残っていなかった。



写真9 シェーネベルガー河畔10番地

また、『Ost=Asien』を印刷していた会社は、創刊号のみアルベルト・ベーレント（Albert Behrendt）社であり、住所はヴァッサートール通り50番地（Berlin S., Wassertorstr.50）であった。通巻No.2号から最終号のNo.139号までの印刷は、すべてオットー・エルスナー（Otto Elsner）社であり、その住所はオラーニエン通り141番地（Berlin S., Oranienstr.141）である。

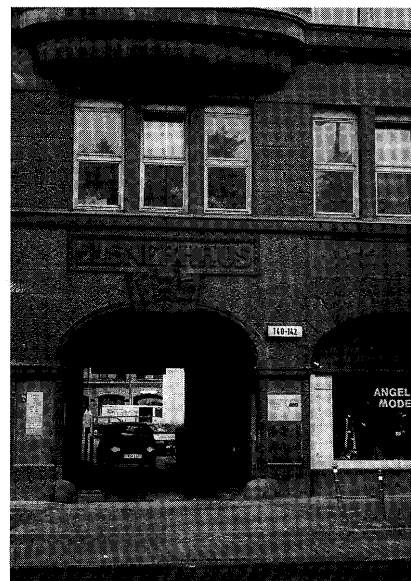


写真10 オットー・エルスナー印刷会社

36ページの地図のように、ツィンマー通りの一つ南の通りがコッホ通り (Kochstr.) であり、それがさらに東南に延びていくのがオラーニエン通りである。この印刷所は、その141番地に今も残って営業していた。前のページの写真10がそれである。現在はこの写真の番地が示すように、140番地から142番地まで敷地を拡張していた。因みに、創刊号を印刷したアルベルト・ペーレント社のあるヴァッサートール通りは、オラーニエン通りのさらに2つ南の通りである。

以上のように、『Ost=Asien』の3箇所の編集室、玉井喜作の学生時代の下宿、日本クラブ、印刷所などを訪ねてみると、それらはすべて第二次世界大戦後の旧西ベルリン側にあったことがわかる。

V. 日本の家族の渡独とベルリンでの生活

1. 家族のベルリン到着

1) 10年ぶりの家族再会

次に玉井喜作の家族の消息を整理しておきたい。玉井喜作は18歳の時 (1884年・明治17) に、日本で結婚している。そして25歳の時 (1891年・明治24) に、札幌農学校のドイツ語教授を辞職した。この時すでに3人の娘が生まれていた。長女綾子、次女韶子、三女文子の3人である。この内長女綾子は、喜作の妻エツの姉の家の養女となっている。玉井喜作のその後の消息は、35頁の年表に記した通りである。

彼が山口県下関港から、ベルリンを目指して一人でシベリヤ経由の冒険旅行に出発したのは、1892年11月17日。そしてベルリン到着が1894年 (明治27) 2月26日であった。『西比利亞征槎紀行』 (『シベリア隊商紀行』) の出版が1898年 (明治31) の年頭、そして同年3月には『Ost=Asien』の創刊号 (4月号) が出版されている。この間家族は、1892年以来ずっと日本にいた。

妻エツと次女韶子、三女文子の3人がドイツに向けて出発するのは、1902年 (明治35) の6月1日である。彼女達は横浜から汽船でドイツに向かった。そしてベルリン到着は同年8月8日。従って、実に10年ぶりの家族再会であった。

『Ost=Asien』の編集室は、既述のように、通巻No. 1~15号がツィンマー通り11番地 (1898年4月号~1899年6月号)、No. 16~52号がハレッシュェ通り13番地 (1899年7月号~1902年7月号)、No. 53~139号がクラインペーレン通り9番地 (1902年8月号~1910年2月号) と移り変わっている。この内1902年の6月頃、ハレッシュェ通りからクラインペーレン通りに引っ越しているのは、家族3人が来ることを見越してのことであろう。

2) マルセイユからベルリンへ

以下、『Ost=Asien』の記事の中から、家族の消息をたどってみたい。まず通巻No. 53号 (1902年8月号) の

目次の下の欄には、ローマ字で以下のように記されている。「御礼! 妻子が日本出発の際は、郷里山口、神戸、名古屋、東京、横浜等にて、また航海中は殊更ご厄介に相成り候段、有り難く御礼申し上げ奉り候。7月21日マルセイユに安着の電報参り候故、8月10日頃にはベルリンに着仕り候。玉井喜作」

次のNo. 54 (1902年9月号) の目次の下の欄には、同じくローマ字で、「御礼! 妻子が日本……有り難く御礼申し上げ奉り候」までは同一文章が書かれている。そしてその次に、「8月8日一同ベルリンに安着仕り候。玉井喜作」と、家族が無事ベルリンに到着した様子が記されている。

これによれば、マルセイユからベルリンまで18日間かかったことになる。ルートとしては、マルセイユ-パリ-ケルン-ハノーファー-ベルリンのコースを取ったのであろうが、いかに当時とは言え、これでは少し時間がかかりすぎるようにも思われる。確かに上記のNo. 53号において、玉井喜作自身が「8月10日頃にはベルリンに着仕り候」と予測しているので、当時は実際にそれくらいの時間がかかったのかもしれない。

しかし世紀転換期のベルリン、そして世紀末のパリに強い関心を持っている筆者は、次のような可能性も否定しきれないでいる。つまり、パリでの列車の乗り換えに際し、ちょうど良い機会なので少しパリの街を見物していく、という余裕を含んでの8月10日頃ベルリン着という可能性である。

なにしろ、あの1900年のパリ万国博覧会からわずか2年後のパリである。ルネ・ラリックの宝飾品やエミール・ガレのガラス工芸、それにサミュエル・ビングのアー・ヌーヴォー館などが注目を浴びた1900年のパリ万博は、当時イギリスに留学中の夏目漱石も訪れている。⁴²⁾川上音二郎・川上貞奴の一行13人も、このパリ万博には出演した。⁴³⁾その2年後のパリである。これを見逃す手はない。と、いささか筆者の願望が強く表れた可能性ではあるが。

3) 滝廉太郎と島崎赤太郎

なお、この同じ1902年のほぼ同時期、玉井エツと娘2人がベルリンに到着してまもなく、滝廉太郎 (1879~1903) は病気のためにライプツィヒから帰国している。彼がベルギーのアントワープを出港したのが8月24日頃、横浜着は10月17日であった。

ライプツィヒからアントワープまでのコースに関して、宮瀬睦夫は、「滝廉太郎を乗せた汽車はライプツィヒからケルンを経て鉄路白耳義のアントワープ (Antwerp) に出た」⁴⁴⁾と記述している。小長久子と松本正は、ライプツィヒとアントワープ港との間の経路は書いていない。⁴⁵⁾滝自身は、幸田幸 (幸田露伴の妹) がまだ留学しているベルリンを、最後にもう一度見たいと思ったのかもしれない。しかし彼の病状では、北を大回りするベルリン経由のコースは無理だったのであろう

う。おそらく宮瀬睦夫の書いているように、アントワープへの最短距離、すなわちライブツィヒから南回りでフランクフルト・アム・マイン-ケルン-アントワープのコースを取ったのであろう。

この滝廉太郎と入れ替わりに、オルガン及び作曲の研究の目的でライブツィヒに留学して来たのが、東京音楽学校で滝の先輩であった島崎赤太郎(1874~1933)であった。彼のドイツ留学は、従来1901年~1902年と記されてきたが、⁴⁶⁾最近の研究によれば、実際は1902年~1906年ということがわかった。

これはおそらく、従来は、彼が1901年(明治34)度の文部省留学生として記録されていることに依拠したからではないかと思われる。確かに、留学の発令年月日は1901年9月である。⁴⁷⁾しかし実際の出国に関しては、1902年3月10日の官報第5601号「学事」の項目に、同年3月8日であったことが記されている。⁴⁸⁾従って島崎は、玉井エツと娘たちよりも約3ヶ月早く日本を出発したことになる。なお彼の帰国は、1906年(明治39)6月29日であった。⁴⁹⁾

2. ベルリンでの生活

1) 王立アウグスタ学校

さて、10年ぶりに家族が揃ってベルリンでの生活が始まった。場所は転居したばかりのクラインベーレン通り9番地である。この時次女韶子は13歳、三女文子は11歳、ともに就学年齢であった。

『Ost=Asien』通巻No.92号に掲載された後述の韶子の追悼記事によれば、彼女たちの通ったのは王立アウグスタ学校であった。⁵⁰⁾この学校の住所はクラインベーレン通り16~19番地であり、⁵¹⁾『Ost=Asien』の編集室、玉井喜作の住居のすぐ側であったことがわかる。クラインベーレン通りは非常に短かく、100メートル足らずしかないので、9番地に玉井一家の住居があり、通りをはさんでおそらくその反対側一帯がこの王立アウグスタ学校であったと思われる。

ハーシュ,G.によれば、この学校のルーツは、1832年にベルリンのフリードリヒシュタット地区に創立された女子高等学校・中学校であった。1863年には「王立アウグスタ学校」と改名され、女性教師のための王立学校と、付属の女子高等学校・中学校から成り立っていた。そして生徒数増加のため、1886年5月1日に、クラインベーレン通り16~19番地に新校舎が完成したということである。これは玉井喜作の娘達がベルリンに到着する16年前である。

アウグスタとは、この学校を後援したプロシア王妃の名前であり、この学校は、数十年にわたってベルリンの各女学校に卒業生を教師として送り込んだそうである。なお第二次世界大戦後の1946年に、この王立アウグスタ学校はゾフィー・シオル高等学校と改名され、さらに40年後の1986年には、ベルリンの高等学校で初

めて日本語の授業を導入している。⁵²⁾

下の写真11は、四女喜代子が生まれて2~3ヶ月目に写したものと思われる。家族のベルリン到着から1年半あまり経った1904年の初頭頃であろう。左から三女文子、妻エツ、次女韶子、四女喜代子、玉井喜作である。



写真11 湯郷将和『キサク・タマイの冒険』
(新人物往来社、1989)口絵p.4より

2) ベルリンでの『寄せ書き』

玉井喜作家の『寄せ書き』⁵³⁾には、日本から家族が来て以来のにぎやかな生活の様子がよく表れている。特に、家族がベルリンに到着した1902年の8月以降、その年の年末までは、実にたくさんの友人知人が玉井家に入りし、頻繁に宴会が行われている。以下その『寄せ書き』から、家族の到着以降、年内いっぱいの記事をたどってみよう。

①1902年8月18日~8月30日

まず家族のベルリン到着の10日後、1902年8月18日には、玉井喜作の妻子の歓迎の宴が催されている。この時は、柏村貞一(1861~1910、1900年冬学期~1902年冬学期ベルリン大学在籍・医学専攻、宮中医)、大井菊太郎(1863~1951、1894年冬学期~1895年夏学期ベルリン大学在籍・法学専攻、1902年~1905年にも渡独、ドイツ大使館勤務、後に陸軍将官級軍人)、長岡外史(1858~1933、1899年からドイツ留学、日露戦争時の

参謀次長)、有川鷹一(1873~1955、1899年~1902年公費留学、後に陸軍将官級軍人)など5名が、この歓迎の宴に出席している。

次に8月30日には、古川市次郎(1863~1929、1902年夏学期~1902年冬学期ベルリン大学在籍・医学専攻、医師)、橋田茂重(1863~1932、1902年夏学期~1903年夏学期ベルリン大学在籍・医学専攻、橋田病院長)、中川十全(1866~1923、1902年夏学期~1903年夏学期ベルリン大学在籍・医学専攻、陸軍医学専門学校医学部長)、賀古桃次(1867~1931、1900年~1903年公費留学、東京帝国大学医学部卒)の4名が宴会に出席している。なお賀古桃次は、森鷗外の親友賀古鶴所の弟である。

②1902年9月11日~10月17日

以下9月11日には後藤新平、熊谷五郎(1869~?、1902年夏学期~1903年夏学期ベルリン大学在籍・哲学専攻、1904年夏学期~1905年夏学期同大学在籍・教育学専攻)の2名。

9月17日には宮本叔(1867~1919、1899年冬学期~1902年冬学期ベルリン大学在籍・医学専攻、後に東京帝国大学教授)、兼松習吉(1874~?、1900年~1903年軍事研究のためドイツ留学、後に陸軍将官級軍人)、平井毓太郎(1865~1945、1899年~1902年公費留学医学専攻、後に京都帝国大学教授)、河村正彦(1868~1924、1900年~1903年公費留学と1913年~1914年公費視察、後に陸軍将官級軍人)、Lisbeth, Matudairaの5名。

9月21日には新渡戸稲造、高岡熊雄(1871~1961、1902年冬学期~1904年夏学期ベルリン大学在籍・財政学専攻、後に北海道帝国大学総長)など3名。

10月17日には岡崎文吉と続いている。

③文子(10月25日)と韶子(11月5日)の誕生日

10月25日は三女文子の11歳の誕生日であり、この日の宴には泉谷氏一、Elsa, Krei?low、河村正彦など4名が出席している。

また11月5日は、次女韶子の13歳の誕生日であった。この日は笠原光興(1862~1913、1894年夏学期~1896年夏学期ベルリン大学在籍・医学専攻、後に京都帝国大学教授)、和辻春次(1863~?、1901年冬学期~1904年夏学期ベルリン大学在籍・医学専攻、後に京都帝国大学教授)、木村徳衛(1871~1946、1901年冬学期~1902年冬学期ベルリン大学在籍・医学専攻、東京の病院長)、渋沢元治(1876~1975、1902年~1906年ドイツ・スイス・アメリカへ私費留学、後に名古屋帝国大学初代総長)、松岡弁(1869~?、1902年~1904年ドイツ・イギリスへ私費留学、後に農商務省参事官)、他に大村仁太郎、高岡熊雄、橋田茂重、兼松習吉、盧百寿など合計14名と多彩である。⁵⁴⁾

3.玉井韶子没、玉井喜作没

1)喜代子誕生・韶子没・太郎誕生

このにぎやかさは、しばらく続く。そして翌1903年(明治36)11月16日には、四女喜代子が生まれている。しかし、やがて1904年2月10日に日露戦争が始まった。玉井喜作は、『Ost=Asien』誌上に戦争に関する様々なデータを掲載することや、日本赤十字社関係のボランティア活動を行うことに忙殺されるようになる。さらにいつの頃からか、情報将校明石元二郎大佐からの依頼で、ロシア、ドイツの新聞などの情報の収集、分析の仕事も加わる。⁵⁵⁾

この多忙な生活の中で、ベルリンの玉井家にもしだいに暗雲が立ち込めるようになった。1905年9月15日には、日露戦争終結後のポーツマス条約が調印された。ちょうどこの日に、次女韶子は盲腸炎のための手術を受けている。しかし事後の経過が思わしくなく、手術から1ヶ月あまり後の10月17日に、彼女は数え年わずか17歳で亡くなった。『Ost=Asien』通巻No.92号には、彼女の追悼記事が掲載されている。この件については、次章で詳しく見ていくことにしたい。

このような中でも、一つだけ明るい話題があった。それは、翌1906年(明治39)5月11日の長男太郎の誕生である。喜作も、次女韶子を亡くした直後でよほどうれしかったのか、『Ost=Asien』通巻No.98号(1906年)の「ドイツにおける日本人の住所」欄の最後に、「お知らせ」として、その事を日本語とドイツ語(同内容)で次のように記している。「妻エツ儀、5月11日男子出産。太郎と命名致候間此段辱知諸君に謹告仕候。在ベルリン 玉井喜作」。⁵⁶⁾

2)玉井喜作没

しかし、長男太郎が生まれて3ヶ月が経った頃、玉井喜作は、自身の病気のために『Ost=Asien』の休刊を告げざるを得なくなる。それは、1906年9月号から11月号までを休刊にし、次号は同年の12月に刊行するという文章である。これは、『Ost=Asien』の通巻No.101号(1906年8月号)に掲載されている。⁵⁷⁾しかしその記載もむなしく、彼は1906年9月25日に病気で亡くなった。享年40歳であった。その追悼記事は本稿30-32ページでみた通りである。

そして既述のように、老川茂信が『Ost=Asien』を引き継ぎ、同年11月号として通巻No.102号を刊行した。その号の「特別広告」欄には、妻の玉井エツ、子どもの文(子)、喜代(子)、太郎の署名入りで、同年9月28日に行われた玉井喜作の葬儀の礼状が掲載されている。これには末尾に「ベルリン1906年11月」⁵⁸⁾と記入してあるので、この時は家族はまだベルリンにいたことがわかる。

また、その次の同年12月号にあたる通巻No.103号には、玉井エツと家族という署名入りで、4年間のベルリン生活の間に大変お世話になったという礼状が掲載

されている。この札状の最後には「室積、熊毛郡、山口県、日本」⁵⁹⁾と記されている。従って、この時にはすでに家族は帰国し、妻エツの実家のある室積（現山口県光市）に帰っていたか、あるいは日本への帰国の旅の船中であつたと思われる。

4. 玉井喜作追悼会

1) 1907年；上野精養軒

翌1907年（明治40）2月21日には、東京上野の精養軒で、玉井喜作追悼会が開かれた。発起人は巖谷小波、大村仁太郎、津軽英麿、姉崎正治、大井菊太郎など57名であつた。この会には、妻エツと、養女に行った長女綾子も含めて4人の子ども全員が出席している。

そしてその席上、玉井の子ども達のために教育資金を募ることが話し合われた。『Ost=Asien』通巻No.123号には、その結果が報告されている。それによれば、露国遭難同朋記念会からの寄付もあり、総計1003円68銭が横浜スピーシー銀行の東京支店に寄託されている。⁶⁰⁾

この時妻エツは37歳、長女綾子は19歳、三女文子は15歳、四女喜代子は3歳3ヶ月、長男太郎は9ヶ月である（すべて満年齢）。養女に行った長女綾子はさておき、乳飲み子も含めた子どもたち3人のかかえ、これからの生活のこと、子ども達の今後の教育のことなどを考えると、妻エツは本当に途方に暮れたことであろう。

2) 教育資金と当時の物価

ところで、この時に集まった総計1003円68銭とは、当時どれくらいの価値を持つ金額であつたのだろうか。ここで再び、当時の物価を調べてみよう。まず教育費関係であるが、この当時の学校の授業料を調べてみると、以下のようになっている。

旧制中学では、1908年（明治41）の年間授業料が30円（日比谷高校の前身、東京府立第一中学校の場合）⁶¹⁾、東京大学は1910年（明治43）の年間授業料が50円、⁶²⁾慶應義塾大学は1912年（明治45）の年間授業料が48円、早稲田大学は同じ1912年の年間授業料が50円である。⁶³⁾ただし慶応・早稲田は文科系の場合であり、実習費などは含まれていない。現在と比較すると、この当時は国立も私立もほとんど差が無いことがわかる。

また国語辞典の『広辞林』（三省堂）は、1907年の定価が2円、⁶⁴⁾『コンサイス英和辞典』の前身『袖珍版英和辞典』（三省堂）は、1902年（明治35）の定価が90銭となっている。⁶⁵⁾

また生活費関係の値段に注目してみると、キャラメルは1908年で10銭（ブリキ印刷缶入り10粒）、アイスクリームは1902年で15銭（東京の高級パーラーでの1個の値段）、国鉄の入場券は1911年で5銭、京都の市電乗車券は1912年で一区大人2銭という時代であつた。⁶⁶⁾もちろん、以上のデータだけでは1003円68銭の価値を

すぐに理解することはできないが、しかし、およその感じは理解され得るのではないと思われる。

3) 1989年；上野精養軒

明治末の玉井喜作追悼会から約80年後、平成元年の夏にも、同じ上野の精養軒で玉井喜作に関する記念会が開かれた。それは、湯郷将和『キサク・タマイの冒険』（新人物往来社、1989）の出版記念会であつた。この著作は、玉井喜作に関する初めての本格的な伝記である。

この出版記念会は、1989年（平成1）7月24日に開催され、玉井喜作の孫や曾孫など関係者約50名ばかりが集まった。同書の序文を執筆した早稲田大学の長沢和俊教授（東西交渉史・中央アジア史）の挨拶や、山口放送のテレビ・ニュースの放映（山口県光市文化センターで1986年1月に開催された玉井喜作展を紹介したもの）などがあつた。玉井喜作の没後、親族がこのようにたくさん集まって故人を偲んだのは、これが初めてであつた。下の写真12は、その折に撮影されたものである。



写真12 1989年7月24日；上野精養軒

VI 玉井韶子のこと

1. 玉井韶子追悼記事

次に玉井韶子のことを記しておきたい。一昨年（2003）の拙稿において、玉井韶子の追悼記事の一部はすでに紹介した。⁶⁷⁾その折にも記したように、この追悼記事を書いたアルベルト・シュテルンは、ジャーナリストであつた。同業者仲間として、玉井家とは親しく交際していたようである。以下は、先に翻訳した部分を除き、それ以外の所を紹介したものである。彼はまず玉井韶子の人となりを紹介し、次に発病から病没までの経緯を次のように伝えている。⁶⁸⁾（ ）内は筆者の補い。

遊ぶ時には朗らかで、大はしゃぎするまでに快活な人、感情が細やかで友情に誠実で、ほんのちょっとした親切にも感謝する人、誰にでも思い

やりがあって親切で、飽くことなく勤勉で義務を果たす人。それが私たちの韶子だった。

韶子はドイツ語を一生懸命に勉強したおかげで、通訳や翻訳をこなすまでになった。父喜作にとっては、『Ost=Asien』の編集室での手助けとなり、母エツにとっては、ドイツで生まれた四女喜代子「Kiki」（彼女は皆から「Kikiキキ」と呼ばれていた）の世話をてきぱきとしてくれる子どもでもあった。

しかし病魔が彼女を襲う。1905年の夏は、避暑地ヘックリングゲン（マグデブルクの南30Km）に行っていたのであるが、病気のために、8月14日にはベルリンに戻ってきた。そして8月28日にアウグスタ病院に入院し、9月15日に盲腸炎の手術を受けた。しかし彼女の体はその大変な手術に耐えることができず、10月17日に彼岸へと旅だっていった。

現代では、盲腸炎の手術は簡単なことのように思えるが、100年前の医学の状態では、まだ大変な手術だったようである。既述のように、この手術の日、1905年9月15日は、日露戦争終結後のポーツマス条約が調印された日でもあった。韶子は手術後1ヶ月の後に亡くなったのだが、直接の死因は、後述の埋葬記録にあるように、腸結核（Darmtuberkulose）であった。これは、腸の内面に結核菌で潰瘍ができる病気である。

続いて、葬儀の折の様子を伝える部分を読んでみよう。

10月のよく晴れた日に（10月20日）、彼女はミルテの枝で飾られた白い柩に乗せられて、ベルリンのフリードリッヒスフェルデにある市立中央墓地へと運ばれた。それには100人以上のドイツ人と、日本人街のほぼ全員にあたる43人の日本人が付き添っていた。

日本人の中には、日本クラブと日本公使館の人たちがたくさんいた。また、王立師範学校（韶子の通った王立アウグスタ学校）の女性教師ヴァイマン女史は、約40人の女生徒を連れてきており、彼女たちはかつての同級生の墓の中へ白い花を投げ入れた。

そして柩が置かれた墓地の納棺堂に於いて、葬儀が行われた。日本の皇太子（後の大正天皇）の侍医である池邊棟三郎博士は、韶子の経歴を語り、故人に日本語で心温まる弔辞を捧げ、最後に次のように述べた。「彼女は、ここで本当に幸せだった。しかし16歳という、感じやすい、青春の真っ直中で、余りにも早すぎる死が、希望に満ちた若い生命を打ち砕いてしまった。彼女は人生の半分を、両親の元で過ごすことができなかったのだ」。

次に、シュテルン、A.自身は、韶子への別れの言葉を以下のように述べている。

深く敬愛する、汝、難を受けし者よ。韶子が知り合いになったドイツのたくさんの友人達が、今ここで、あなたへ別れの言葉を呼びかけている。あなたが現れるところではどこでも、あなたは其の愛すべき性格と、他人に対する細やかな思いやりによって、そしてまたその上品さによって、人々の心を捉えてきた。

私たち皆が、その早世を悼み悲しんでいるこの若人は、最も高貴な純粋な心を持った人であった。彼女こそが、天の父なる神の高みへと昇天していくのである。韶子よ、光の天使としていつも私たちを見守り給え。そして（韶子との）思い出に祝福あらんことを。そしてまた、彼女の家族と友人に神の祝福があらんことを。アーメン。

そして最後に、彼は埋葬の様子を次のように伝えている。

讃美歌、「魂は何処に故郷を、安らぎの地を見いだすのであろうか」が厳粛に歌われた後、韶子の亡骸は最後の安らぎの地へと導かれた。日本語の碑文が書かれたほっそりとしたオベリスクが、ここに誰が埋葬されているかを告げている。安らかに眠り給え、汝良き子よ。あなたは何千マイルもの海を渡って来て、この地を第二の故郷としたけれども、余りにも早すぎる自分の墓標を見いだすことになってしまった。安らかに眠れ、ドイツの地に。

以上が、シュテルン、A.による追悼の辞である。この後に、両親のお礼の言葉が次のように記されている。また次のページの写真13は、この追悼文に掲載された玉井韶子の写真である。

謝辞

私たちの次女、韶子の死去及び葬儀に際し、数多くの方々による愛情のこもった心からのご列席を給わり、また大変高価な花をたくさんいただいたことに対しまして、私たちはこの紙面をお借りし、すべての友人知人に心から感謝の気持ちを申し上げる次第です。同時にまた、娘韶子とその存命中に給いましたご厚情に対しまして、私たちは皆様に深く感謝いたしております。

ベルリン、1905年10月30日

玉井喜作

妻玉井エツ 旧姓原田



写真13 玉井 韶子

2. 玉井 韶子；ベルリン→ハンブルク→山口県光市

1) フリードリッヒスフェルデ中央墓地

最後に、玉井 韶子が埋葬された墓地を訪れた時のことを記しておきたい。1999年の6月と9月のベルリン調査の折に、この墓地にも行ってみた。ベルリン郊外にある、フリードリッヒスフェルデ中央墓地がそれである。地図を見ると、ベルリン市内からこの墓地に行く場合には、地下鉄5番線に乗れば良いことがわかった。しかし下車駅は、フリードリッヒスフェルデ駅ではなく、一つ手前にあるリヒテンベルク駅で降りた方が近いことも判明した。

1999年6月14日に、旧東ベルリン時代の中心地であったアレクサンダー広場から、地下鉄5番線に乗った。8つ目のリヒテンベルク駅で下車して地上に出る。しばらくSバーン（都市近郊電車）の路線に沿って歩くと、バス停があった。次のバスが来るまで少し時間があつたので、すぐ側の喫茶店に入り、コーヒーを飲みながら地図を見た。すると、この場所はベルリンの繁華街からそれほど離れた所ではなかった。アレクサンダー広場を起点に直線距離を測ってみると、泊まっていたクーダム通りのホテルへの距離と、中央墓地への距離は、ほぼ同じであった。

一休みした後バスに乗ると、5分もしない内に中央墓地の入り口に着いた。右の写真14が中央墓地の入り口であり、写っているのは筆者である。中に入ってみると、次の写真15のように、緑の多い広大な公園墓地であった。

2) 埋葬記録

玉井 韶子が亡くなり、この墓地に埋葬されたのが1905年。筆者が調査に訪れたのが1999年である。その間実に94年、約1世紀近くの時の隔りがある。はたして記録など残っているものかと心配であった。

しかし、墓地入り口の管理事務所で事情を説明すると、なんと、すぐに奥から埋葬記録をコピーして持ってきてくれた。さすがにアルヒーフの国ドイツ、と驚

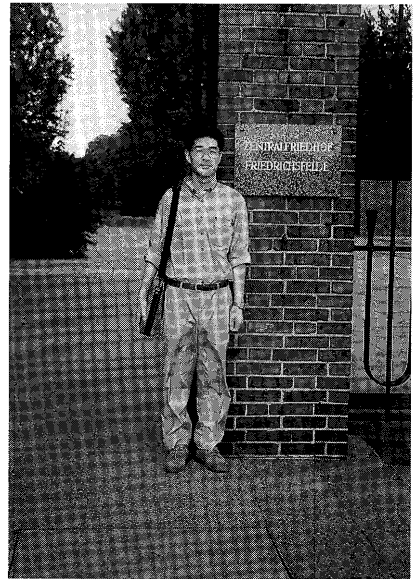


写真14 フリードリッヒスフェルデ市立中央墓地入口



写真15 フリードリッヒスフェルデ市立中央墓地内部

いた。様々な文書記録が、本当にきちんと整理保存されている。

その中から、玉井 韶子の部分のみを取り出したものを、次のページの上に掲載した。この墓誌は左右見開きになっており、上段に掲載したのが左のページ、下段に掲載したのが右のページである。非常に読みにくい字であるが、不明の箇所は、墓地管理事務所の係の女性に教えてもらい、次のように判読できた。

「墓誌整理番号384番、玉井 韶子は女学生で享年満15歳、住所はクラインペーレン通り9番地。亡くなったのはアウグスタ病院、死因は腸結核 (Darmtuberkulose)。生まれは日本の札幌、亡くなったのは10月17日、葬儀は10月20日。埋葬場所は納棺堂の前の右15番の区画、無宗教、戸籍役場番号11。1906年11月14日に掘り出され (ausgraben)、ハンブルクに移送された」。

[illegible]

玉井韶子の埋葬記録（見開き 2 ページの内、上段が左のページ、下段が右のページ）

つまり、玉井韶子が亡くなったのが1905年10月17日。翌1906年9月25日には、父の玉井喜作も亡くなり、葬儀は9月28日に行われた。その後家族は跡片付けをして、同年11月下旬頃には帰国の途に着いたと思われる。その時に、母親のエツは、次女韶子のみをドイツに置いて帰るのは忍びないと思ったのであろう。そこで、帰国直前の11月14日に中央墓地に行って遺体を引き取り、ハンブルクで改めて茶毘に付した。そして韶子は、家族とともに、なつかしい故国日本へ帰っていったということであろう。

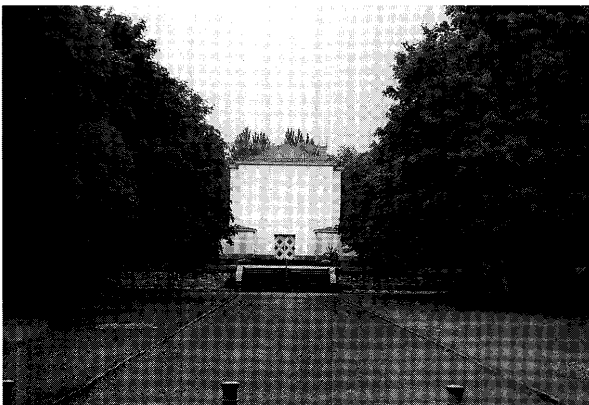


写真16 中央墓地の納棺堂

3) 94年ぶりの墓参

上の写真16は、中央墓地の納棺堂である。ここは、埋葬するまで柩を置いておく場所であり、葬儀会場となる。また次の写真17は、玉井韶子が埋葬されていたあたりで写したものであり、これは1999年の9月に

行った時のものである。写っているのは筆者の母、泉明子である。彼女は、玉井喜作の四女喜代子の娘であり、ここに埋葬された韶子の姪にあたる。韶子の葬儀以来、実に94年ぶりの墓参となった。



写真17 次女韶子の埋葬地で・玉井臺作の孫泉明子

次のページの写真18は、ハンブルク中央駅である。
今は、ベルリンのツォローギッシャー・ガルテン駅
からハンブルク中央駅までは、特急に乗れば2時間20
分あまりの距離となっている。

また次の写真19は、ハンブルク港である。明治時代には、アントワープ港やハンブルク港は、日本からの



写真18 ハンブルク中央駅

汽船の乗客のヨーロッパへの入り口であり、また帰国の途につく際の出口となった。ベルリン大学に学び、日本へ帰れば帝国大学の教授の椅子が約束されているような帰国もあれば、滝廉太郎や、玉井エツと3人の子どものような帰国もあった。この港は、そのような悲喜こもごもの人生模様を見届けてきたのであろう。

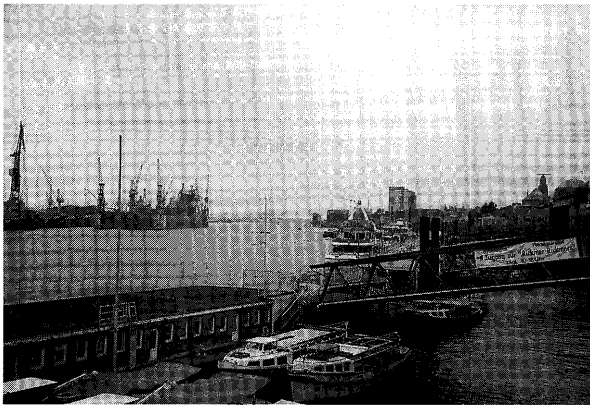


写真19 ハンブルク港

4) 山口県光市；玉井喜作と玉井韶子の墓

現在山口県光市に行くと、玉井喜作の生家の造り酒屋の近くに、彼の墓が建っている。右上の写真20がそれである。これを左側から写したものが、その次の写真21である。

写真21の2つの墓の内、右の大きい方が玉井喜作の墓であり、左隣の小さい方が玉井韶子の墓である。韶子の墓の正面には「発心院玉顔妙韶大姉」、左の面には「明治三十八年十月十七日」、右の面には「玉井韶子之墳」と記されている。本稿が出版される2005年は、玉井韶子没後100年の年であり、翌2006年は、玉井喜作没後100年となる。

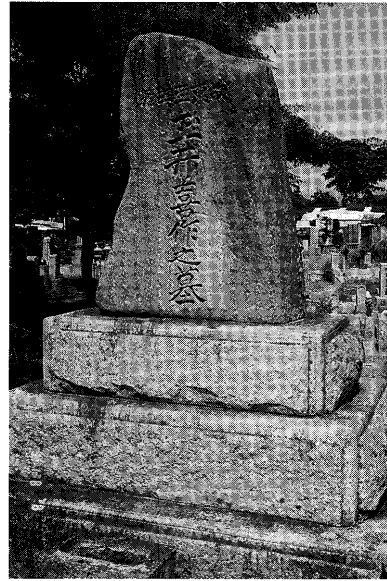


写真20 玉井喜作の墓・山口県光市

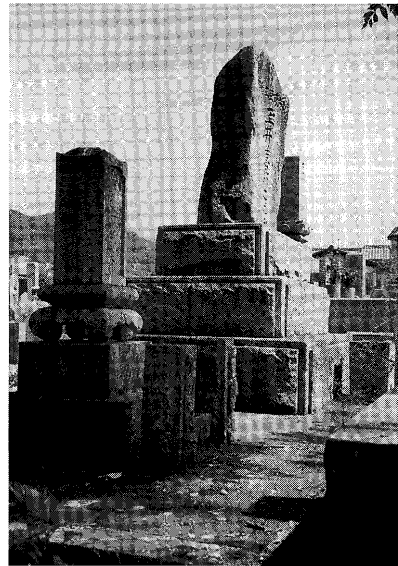


写真21 玉井喜作と玉井韶子の墓

【注】

- 1) 『和歌山大学教育学部紀要 人文科学』第52集、2002年pp.107-204
- 2) 『和歌山大学教育学部紀要 人文科学』第53集、2003年pp.33-71
- 3) 『和歌山大学教育学部紀要 人文科学』第54集、2004年pp.43-79
- 4) 『和歌山大学教育学部紀要 人文科学』第54集、2004年pp.81-179
- 5) Kisak Tamai; Vorwort. Ost=Asien, Nr. 1, 1898, I-1, s. 2. 以下『Ost=Asien』からの引用の際、通巻号数はNr. で、また巻一表示はローマ数字-アラビア数字で表記

- する。Nr. 1, 1898, I-1 は、通巻号数第1号、1898年、I 巻の1号の略である。なお玉井喜作は自分の名前「喜作」を、ドイツでは「Kisaku」と書かずに、最後のuを取って「Kisak」と書いていた。本稿の題名のアルファベット表記も、それに従って「Kisak Tamai」とした。
- 6) 玉井喜作「本誌発行の趣旨」, Ost=Asien, Nr.1, 1898, I-1, s. 3
 - 7) 拙稿「『Ost=Asien』研究～その3. 人名注解；日本人編」上記注3) p.54
 - 8) 湯郷将和『キサク・タマイの冒険』（新人物往来社、1989）p.29, p.242
 - 9) 獨協学園百年史編纂室編『獨協百年』（獨協学園百年史編纂委員会、1981）第5号p.101
 - 10) 獨逸学協会学校の成立や同窓生のことに關しては次の文献を参考にした。七十五年史編集委員会編『獨協学園七十五年史』（獨協学園、1959）p.144、獨協学園百年史編纂室編『獨協百年』第4号（獨協学園百年史編纂委員会、1980）口絵p.12, pp.376-379、獨協学園百年史編纂委員会編『目で見ると獨協百年』（獨協学園、1983）pp.104-105。
 - 11) 週刊朝日編『値段史年表 明治・大正・昭和』（朝日新聞社、1988）p.91, p.92, p.51, p.67, p.144, p.111, p.141, p.185
 - 12) 週刊朝日編『新・値段の明治大正昭和風俗史』（朝日新聞社、1990）p.199
 - 13) 湯郷将和『キサク・タマイの冒険』前掲p.132
 - 14) 巖谷小波『洋行土産』（博文館、1903）上巻p.146, p.292, 下巻p.299など
 - 15) 湯郷将和『キサク・タマイの冒険』前掲、大島幹雄『シベリア漂流 玉井喜作の生涯』（新潮社、1998。この本は『Ost=Asien』創刊100年記念の年に出版されている）、新村俊武「ドイツで健筆・国際ジャーナリスト玉井喜作」産経新聞「日本人の足跡」取材班編『日本人の足跡三 世紀を越えた「絆」求めて』（産経新聞ニュースサービス、2002）pp.255-286
 - 16) Kisak Tamai †. Ost=Asien, No.102, 1906, IX-6, s.231 ff.
 - 17) Kisak Tamai. Karawanen-Reise in Sibirien. Berlin, Karl Siegismund. 1898, s. i - ii. 玉井喜作『シベリア隊商紀行』小林健祐訳（筑摩書房、1963）p.187、中野好夫他編『世界ノンフィクション全集47』所収。玉井喜作はこの本をドイツ語で出版した時に、『西比利亜征伐紀行』という日本語の題名を並記している。これが65年後に、『シベリア隊商紀行』という題名で日本語に翻訳された。
 - 18) 厚生労働省大臣官房統計情報部『完全生命表』より。
 - 19) 松濤弘道『世界の葬式』（新潮社、1991）pp.69-70
 - 20) Zum 10 jährigen Bestehen der Monatschrift 《Ost=Asien》. Ost=Asien, No.121, 1908, XI-1, s.11
 - 21) Hartmann, Rudolf. Japanische Studenten an der Berliner Universität 1870-1914. Berlin, Mori-Ôgai-Gedenkstätte der Humboldt-Universität zu Berlin, 1997. 2000². s.50
 - 22) 《Nippon-Klub》in Berlin W., Schöneberger Ufer 10, Ost=Asien, No.62, 1903, VI-, 2, s.56
 - 23) Meine direkten Sendungen nach Japan. Ost=Asien, No.98, 1906, IX-2, s.59
 - 24) 湯郷将和『キサク・タマイの冒険』前掲p.237
 - 25) Zur gütigen Beachtung. Ost=Asien, No.102, 1906, IX-6, s.223
 - 26) Besondere Anzeige. Ost=Asien, No.102, 1906, IX-6, s.224
 - 27) 笠森傳纂編『財団法人啓明会第22回講演集 老川茂信「獨逸の近況」』（啓明会事務所、1927）pp.1-2。この本の付録にある啓明会職員名簿によれば、同会顧問は牧野伸顕（外相、文相などを歴任）が務め、評議員に新渡戸稲造（法博・農博）、長岡半次郎（理博）、古在由直（農博）、大河内正敏（工博）などが名を連ねている。
 - 28) 湯郷将和『キサク・タマイの冒険』前掲pp.242-243
 - 29) 地図資料編纂会編『19世紀欧米都市地図集成第I集』（柏書房、1993）p.77。また1895年版のBrockhaus' Conversations=Lexikon.14.Auflage: Leipzig, Berlin und Wien: F.A.Brockhaus, 1895-1897.の第2巻の項目、「Berlin」の地図にも同じ記号が記入されている。
 - 30) 注21) と同書s.54
 - 31) 斎藤茂太『精神科医三代』（中央公論社、1971）p.40
 - 32) 注21) と同書s.62
 - 33) Alt-Berliner Photoalbum. Berlin, Nicolaische Verlagsbuchhandlung, 1998. この本にはページ数が全く付されていないが、第二次世界大戦の時のベルリン空襲直後の写真は、最終ページに掲載されている。
 - 34) 新村俊武「ドイツで健筆・国際ジャーナリスト玉井喜作」前掲p.257
 - 35) 小塩節『ドイツのことばと文化事典』（講談社、1997）pp.365-366
 - 36) 小塩節『ドイツの生活と文化』（講談社、1993）pp.66-97
 - 37) 三宅悟『私のベルリン巡り 権力者どもの夢の跡』（中央公論社、1993）p.152の地図がわかりやすい。またp.226とp.251に、この路地と壁との位置関係が描写されている。
 - 38) 芳賀徹『大君の使節 幕末日本人の西欧体験』（中央公論社、1968）pp.165-171
 - 39) 久米邦武編・田中彰校注『特命全權大使 米欧回覧実記』三（岩波書店、1979）pp.300-314
 - 40) Die erste japanische Gesandtschaft am Berliner Hof. Ost=Asien, No.13, 1899, II-1, s.14ff.
 - 41) 拙稿「『Ost=Asien』研究～その3. 人名注解；日本人編」前掲p.56
 - 42) 吉見俊哉『博覧会の政治学 まなざしの近代』（中央公論社、1992）pp.81-83
 - 43) 山口玲子『女優貞奴』（朝日新聞社、1993）pp.121-122
 - 44) 宮瀬睦夫『滝廉太郎伝』（大空社、1996）p.245、初版は関書院、1955。
 - 45) 小長久子『滝廉太郎』（吉川弘文館、1968）p.235、松本正著・大分県立先哲資料館編『滝廉太郎』（大分県教育委員会、1995）p.251
 - 46) 森節子『島崎赤太郎』『音楽大事典』（平凡社、1982）第3巻pp.1045-1046、「島崎赤太郎」『新訂標準音楽辞典 ア・テ』（音楽之友社、1991）p.777
 - 47) 渡辺實『近代日本海外留学生史』下巻（講談社、1978）p.855
 - 48) 赤井励『オルガンの文化史』（青弓社、1995）p.123より。
 - 49) 同書p.127
 - 50) Stern, Albert. In deutscher Erde. - Aki Tamai. Ost=Asien, No.92, 1905, VIII-8, s.312
 - 51) Haasch, Günther. Wechselbeziehungen Berlin-Tokyo im Bildungsbereich. in: hrsg. von Brenn, Wolfgang. u. Goerke, Marie-Luise. Berlin -Tokyo im 19. und 20. Jahrhundert. Berlin, Springer Verlag, 1997, s.375
 - 52) ibid.s.375f.
 - 53) 泉巖復刻『玉井喜作宅における寄せ書き』（私家版、1986）
 - 54) 各人の留学歴、職名などは注21) と、渡辺實『近代日本海外留学生史』上下2巻（講談社、1977-1978）、及び手塚晃他編『幕末明治海外渡航者総覧』全3巻（柏書房、1992）に基づ

いている。また拙稿『『Ost=Asien』研究～その3.人名注解；日本人編』前掲pp.43-79に記載した人物の留学歴、職名などは省略した。さらに新渡戸稲造など現在の百科事典にも載っている人物に関しても説明は省略した。なお笠原光興は留学の時期が早いから、1902年11月5日には再渡欧していたものと思われる。

- 55) 拙稿『『Ost=Asien』研究～その2.人名注解；外国人編』上記注2) pp.45-47
- 56) Japanische Adressen in Deutschland. Ost=Asien, No.98,1906,IX-2,s.51
- 57) Kusak Tamai. Zur gefl. Beachtung! Ost=Asien, No.101,1906,IX-5,s.179
- 58) Besondere Anzeigen ; Yetsu Tamai, Fumi, Kiyo, Taro als Kinder. Danksagung! Ost=Asien, No.102,1906, IX-6,s.234
- 59) Besondere Anzeigen ; Yetsu Tamai nebst Familie. Danksagung! Ost=Asien, No.103,1906,IX-7,s.267
- 60) Erste Mitteilungen betreffend die Kollekte für das Erziehungskapital der Kinder des verstorbenen Chef-redakteurs Kusak Tamai. Ost=Asien, No.123,1908, XI-3, s.122f.
- 61) 週刊朝日編『続・値段の明治大正昭和風俗史』(朝日新聞社、1982) p.229
- 62) 週刊朝日編『続・値段の明治大正昭和風俗史』(朝日新聞社、1981) p.119
- 63) 週刊朝日編『値段の明治大正昭和風俗史』(朝日新聞社、1981) p.35

- 64) 週刊朝日編『同書』p.141
- 65) 週刊朝日編『続・値段の明治大正昭和風俗史』前掲p.149
- 66) 週刊朝日編『完結・値段の明治大正昭和風俗史』(朝日新聞社、1984) p.31,p.197,p.221,p.237
- 67) 拙稿『『Ost=Asien』研究～その2.人名注解；外国人編』前掲pp.64-65
- 68) 注50) と同記事s.312f.

【正誤表】

昨年の拙稿『『Ost=Asien』研究～その4.全目次；独語版』における誤植を記しておきたい。

場 所	誤	正
p.82 下から6行	pp.47-84.	pp.33-71.
p.103下から2行目	IV	IX
p.149下から2行目	günstigen	gütigen

【付記】

明治時代の物の値段に関する様々な文献と、当時の値段の現在への換算に関する種々の解釈については、玉井喜作の伝記の著者、産経新聞社の新村俊武氏(本稿注15参照)に多くを教わった。ここに記して深謝の意を表する次第である。

また、獨協大学総合企画課天野記念室の村山新市氏には、獨協学園百年史編纂室編『獨協百年』第1号～第5号(獨協学園百年史編纂委員会、1979-1981)をお送りいただいた。これらは、草創期の獨逸学協会学校の歴史を研究する上で、大変貴重な資料となった。ここに改めて心よりお礼申し上げる次第である。